

---

# 空と桜の冒険記録

光太郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

空と桜の冒険記録

### 【Nコード】

N2109E

### 【作者名】

光太郎

### 【あらすじ】

塾に向かう道のとちゅう、空と桜は不思議な丸い穴を見つける。

それは、異世界への入り口で……………。空と桜、二人の兄妹の、異

世界冒険記録！      ムーンチャイルド企画参加作です

## はじめに

【はじめに】 担当 桜

ええと、これは、日記です。

「です」って変だな。ですはなし。

ここに書いていくことは、ぜんぶ、本当にあったこと。あ、お兄ちゃんが書くのはどうかかわかんないけど ううん、でも、お兄ちゃんだって本当のこと書くはず。だって、本当にあったことがぜんぶ、うそみたいなんだから。そこにわたしたちがうそを加えたんじゃない、なにがなんだかわかんなくなっちゃう。

なので、本当のことしか書きません。

あんまりたくさん、いろんなことがありすぎて、夢なんじゃないかって思っちゃいそうだから、忘れちゃわないように、お兄ちゃんと二人で日記を書くことに決めました。

だから、日記っていつても、思い出して書いているわけで……こういうの、なんていうのかな、記録？ うん、それでいこう。

これは、記録。

わたし、相川桜と、お兄ちゃん、相川空と……それから八ぜやプティたちと、あのすてきな世界の、大切な記録。

大きくなったわたしやお兄ちゃんや、もしかしたらほかのだれかが、これを読むのかな。

どんな気持ちで読むんだろう。やっぱり、うそみただって思うのかな。

とと、早く書けって、お兄ちゃんが怒ってる。あ、そんなこと書くなってまた怒られちゃった。

それじゃ、始めます。

## 空と桜の冒険記録

五月七日

【五月七日】 担当 桜

始まりは、五月七日。ゴールデンウィークが終わっちゃった、最初の月曜日。

時間はたぶん、四時半ぐらい。わたしとお兄ちゃんは、塾に行く途中だった。

「お兄ちゃん、そっちじゃないよ？」

いつのまにかいつもの道じゃなくなつて、変だな、と思った。でも、お兄ちゃんはなにもいわないし、もしかしたら近道なのかもしれないとも思つて、わたしはおとなしくついて行った。

そうしたら、公園にたどり着いた。

家から歩いて十分の、太出山公園。近所の幼稚園の運動会がここで行われるぐらいの、大きな公園だ。わたしもお兄ちゃんも、よく遊びに来る。

お兄ちゃんは、だまつてずんずん進んでいく。わたしはまだ、近道なのかなと思つていた。ここを通り抜けて行くのになつて。でもちがつてた。

お兄ちゃんは、お山のすべり台のてっぺんまで登つて、そこでリュックサックを下ろした。

「塾は？」

お兄ちゃんは答えない。しかたなく、わたしも登る。わたしのはシオルダーバックだから、石をつかんで登るときに、ずるずると引きずってしまった。三月に買ってもらったばかりの、お気に入りなのに。

教科書とワークが重くて、バランスが難しかったけど、それでもなんとか登る。てっぺんに着いてみたら、お兄ちゃんは『ファイニンミニ』っていうゲーム機を出して遊んでた。

最初から遊ぶ気で持ってきたんだ。信じられない！

「お兄ちゃん！ 塾はどうするの、遅れちゃうよ！」

あたりまえにわたしは怒ったけど、お兄ちゃんはそのままゲームをやり続けて（たぶんきりのいいところまでやったんだと思う）、それからやつとこつちを見た。

「おまえだけ行けばいいじゃん。もう一人でも行けるだろ」

もちろん行ける。三月から通い始めて、週に二回、もう二ヶ月だ。でも、問題はそこじゃない。

「お兄ちゃんは？」

聞かなくてもわかったけど、一応聞いてみた。

「さぼる」

やっぱり！ ママが聞いたらなんていうだろう。いや、なにもいわずにげんこつだ、きつと。わたしが代わりになぐってやるうか。

わたしの怒りが伝わったのか、お兄ちゃんはちょっと困ったような顔をした。

「だってさ、ゴールデンウィークが終わっていきなり塾だぞ。学校だけでうんざりなのに。オレは絶対行かない」

「……怒られるよ」

「ばれたらな」

わたしはお兄ちゃんのとりにすわった。ばれないとも思ってるのかな。

そのままゲームをやり始めたのを見て、かばんから携帯電話を取り出す。ママのやつだ。なにかあったときのために、塾のときは持たされてる。お兄ちゃんじゃなくてわたしにあずけてるってことは、こういうことを予想してたんだと思う。

「待て、待て、桜！ それはちょっと待て！」

お兄ちゃんはあわてて、わたしの手から携帯電話をとろうとした。わたしはひよいと手をあげて、それをかわす。だってこのままじゃ、わたしだって怒られちゃう。わたしがいま電話しなくても、塾から家に電話がいくだろうし。もう一年も塾に通ってるのに、どうして

そういうことわからないだろう。

「おまえはあそこのおそろしさを知らないんだ！ オレはもううんざり！ 宿題やってないから、行ったってどうせ二時間まるまる説教だし」

つまり、怒られるのがいやで、行きたくないんだ。

「でも、行かなきゃしょうがないよ。わたしは好きだよ、けーこ先生おもしろいし、ゆきちゃんたちもいるし」

ゆきちゃんたちってというのは、ほかの小学校から来てるのもただだ。四年生から塾に行く子はあんまりなくて、心細かったけど、すぐに仲良くなった。けーこ先生は、若くてきれいで、怒るとちょっとこわいけど、楽しい先生。

「しょせん小四の勉強だろ。五年にもなると、いろいろと難しいんだよ。オトナの事情ってやつだ」

「ばかみたい。五年生だつてこどもじゃん」

「ばっかおまえ、一年ちがうとぜんぜんちがうんだよ」  
お兄ちゃんは胸を張って、いかにも偉そうにいった。変なの。一年ちがってオトナなら、ママたちなんてどうなっちゃうの。

「電話する」

わたしはもう、ママに助けを求めることにした。携帯電話を開く。携帯電話だから、市外局番から入れなくちゃいけない。あ、でも短縮ダイヤルに入ってるだろうから、そこから探して

「すきあり！」

「あ！ ちよつと！」

やられた！

携帯電話を取り上げて、お兄ちゃんがあつというまに山をすべり下りる。そのままちよつとこつちをふり返って、勝ち誇ったように笑って走り出した。

悔しい！ なにがオトナなんだろう、やってること、まるっきりこどもだ！

「待ってよー！」

わたしもすぐにすべろうとして、でもかばんが開けっ放しだったから、あわてて閉めてあとを追った。そのちよつとの間に、お兄ちゃんはどうんどん遠くに行っちゃってる。うしろ姿が小さい。

「おにーちゃん！ どうせすぐばれるよ！ 怒られるよ！ ねえ！」  
おなかの底から声を出す。それでも、お兄ちゃんは止まらない。それはそうだ。そんなことで止まるぐらいなら、きっと最初からさぼろうなんて思っていない。

走って走って、長そでのシャツが暑くてしょうがなかったけど、脱いでる間に見えなくなっちゃったら困るから、がまんしてとにかく走った。

お兄ちゃんは、大きな広場の横を走り抜けて、テニスコートのほうに向かっていく。それ以上行ったら、見失っちゃう。

でも、見失うことはなかった。  
お兄ちゃんは、急に止まった。テニスコートの横の、ベンチの前で。なんで止まったかはわからないけど、チャンスには違いないから、わたしは必死で追いつく。

走りながら、変だな、と思った。

小さいころは、これぐらいの時間にもよくこの公園に来たけど、もっとたくさんの方がいたはずだ。

広場でサッカーをしているひとたちとか、テニスコートにマイラケットを持ってくる、ジャージのひとたちとか。それに、犬の散歩のお姉さんとか、ベビーカーを押してるお母さんとか、自転車で走り回る男の子たちとか……

でも、今日は、だれもない。

わたしとお兄ちゃん以外、だれも。

なんだかこわくなった。でもお兄ちゃんに追いついたら、そんな不安な気持ちはどこかに行ってしまった。

「お兄ちゃん！ もう、いいかげんにしてよ！ ちよつとぐらい遅れてもいいから、いまからでも塾に行こうよ！」  
でも、お兄ちゃんは答えなかった。

それどころか、ぴくりとも動かない。

だらしなく右肩だけにリュックサックを引っかけて、ママの携帯電話は左手に持って、わたしが怒鳴ってるのにちっともこっちを見ないで、まっすぐに前だけ見てる。

「……………どうしたの？」

あれだけ逃げてたくせに。

わたしはお兄ちゃんの顔をのぞきこんだ。おばけでも見たみたい  
に、目をめいっぱい開いて、前を見てた。

わたしは、急にどきどきした。そこになにがあるんだろう。走っ  
てきたときには、なにも気づかなかったけど。

「あれ、なんだと思う」

やっと、お兄ちゃんが声を出した。すぐまじめな声だったけど、  
わたしはちよっと安心して、軽い気持ちでそれを見た。

「……………？」

見まちがいかと思った。

何度もまばたきをして、目を細めてじっと見る。

まるで、大きなシャボン玉が浮いているみたいだった。わたしの  
身長よりも大きいぐらいの、細長いたての丸。シャボン玉みたいに  
向こう側が透けて見えるけど……………なんていえばいいのかな、図工で  
使う透明なフィルムを切り取って、空中にはりつけたみたい。透  
明っていつても、もやもやしてて、明らかにそこだけおかしい。そ  
れが、ベンチの横の、地面から三十センチぐらい上に、あった。

浮いてた、って感じじゃない。だって、ふわふわしてないんだも  
ん。写真の上に透明シールをはったような、そういう感じ。

もちろんそんなの、いままで見たこともない。

「なんだろう……………。虹とか、そういうの？」

わかるはずもなく、思いついたことを口に出す。お兄ちゃんは  
ばかにしたように、それでもやっところちを見た。

「虹？　なんでこれが虹だよ。虹ってのはなあ……………」

「いいよ、説明してくれなくて。知ってるから」

だって、ほかになんにも思いつかなかったんだから、しょうがないじゃん。

「これは、もしかしたら……怪奇現象とか、そっちかもしれない。ほら、よくテレビでやってるやつ」

「ええ、そうかなあ」

虹もどうかと思うけど、怪奇現象っていうのもどうだろう。あんなのぜんぶうそだって、みんないつてる。

オトナとかいつてるくせに、そういうのは信じてるんだ、お兄ちゃんってば。

「お、そうだ。写真撮るところ。テレビ局に送ろうぜ」

お兄ちゃんの目はきらきらしていた。さっきまではかみたいに口開けて見てたのに。携帯電話をかまえて、ボタンを押す。シャリーンっていう電子音。

「撮れた？」

わたしは塾のことは思い出していたけど、こっちのほうが気に入ったので、お兄ちゃんと一緒に画面をのぞきこんだ。

「……あれ？」

「写ってないよ？」

写ってたのは、ただのつまらない風景写真。でも、場所はたしかにあってる。ベンチのとなりの、向こう側にたくさんの木が見える、この場所。

「変だな」

納得がいかないようで、お兄ちゃんがもう一度携帯電話をかまえる。今度はわたしも一緒に見た。でも、撮影ボタンを押すまでもなく、そもそも画面にあの細長い丸が映し出されていなかった。これでは、写真に残るはずがない。

「なんだか、こわくなってきた。」

ここで初めて、ふだんたくさん人がいるはずの公園に、わたしたち以外だれもいないことを思い出す。

「なんだか、いつもとちがう。」

急に心臓がどきどきいだして、わたしはお兄ちゃんの服のそでをつかんだ。

「ねえ、もういいから行こう。塾もやめて、もう帰ろうよ」  
できるだけいつもどおりの声のつもりだったけど、すごく情けない声になった。こわいと思っちゃったら、あとはもうごんごんこわくなるだけだから、一生懸命ふつうでいようとすする。

でももう、遅かった。

うしろもふり返られないくらい、こわくてこわくて、しょうがなくなっていた。

「なんだよ、こわがりだな。こんなの、なんかしかけがあるに決まってる」

「お兄ちゃんが怪奇現象とかいったんじゃん！」

「ばっか、おまえそんなの、うそに決まってるだろ」

いつてることがむちゃくちゃだ。帰ろうっていつてるのに、お兄ちゃんはきらきらと目を輝かせて、細長い丸に近づいていく。さすがに触る勇氣はなかったのか、向こう側に回り込んだ。

こっちから見たら、お兄ちゃんの姿がちょっとぼやけて見えた。

やっぱり、透明フィルムを通してみたみたいに。

「ねえ、やめとこうよ。なんか変だよ」

「なにがだよ。どうってことないって、こんなの」

もしかしたら、わたしがこわがっていることが、逆にお兄ちゃんをその気にさせてるのかもしれないなかった。

お兄ちゃんはこちら側に戻ってきて、背伸びしたりしゃがんだり、横から見たり下から見たりと、観察を始める。ほんの十数秒間観察したかと思ったら、信じられないことに、それに手を伸ばした。

直前で、ためらう。わたしはお兄ちゃんを止めるのも忘れて、息を飲む。

「触るぞ」

一言。それから一気に、触れた。

でも、実際には、触れなかった。

そこにはフィルムもなにもないみたいだった。そのまま、なににも触れず、指先が進んだだけ。

「……なにもない」

少しつまらなそうにそういって、手を握ったり開いたりする。わたしは心底ほつとした。触れないし写真にも写らないっていうことなら、もう目の錯覚ってことにするしかない。とりあえず害はなさそう。

「ね、もう行こう」

もう気がすんだでしょ？

でもお兄ちゃんは、まだまだ帰る気はなさそうだ。手を伸ばしたままで、身体をひねって向こう側から見ようとすする。

「うわ!」

やめてよ、と思った。どうせわたしを驚かそうとしてるんだ。

「ちよ、桜、こつち来てみる!」

でも、あんまり必死にいうから、おとなしく行ってみる。細長い丸の向こう側から、お兄ちゃんの指すところを見て

息が止まるかと思った。

そこには、お兄ちゃんが伸ばした手が見えなくちゃいけないのに、指先が切れてなくなっちゃったみたいになにもなかった。

「すげえ……」

お兄ちゃんが、そっと手を引つ込める。ちゃんと、指はある。

「どついうこと?」

「……ってことは……」

お兄ちゃんは地面から石ころを拾って、細長い丸に向かって投げる。向こう側に行ったように見えるのに、反対側から石ころが飛んでくることはなかった。どちらからやっても同じ。

「すげえ! これ、どっかにつながつてんだぜ、きつと! ワープ装置だったりとか……もしかしたら、異世界への入り口とかさ、そついうの!」

ますます目を輝かせてる。わたしはというと、ますますこわくな

っていた。

だって、おかしいことが起こってる。これって、どういうこと？  
投げたはずの石ころは、どこに行っちゃったの？

「もうやだよ、こわいよ！ だれか呼んでこよう？」

「なんでこわいんだよ、楽しいじゃん！」

もう、完全に意見が食いちがってる。わたしだけでも帰りたかったけど、ひとりで帰るのもこわい。ここだけじゃなくて、そこらじゅうにこんなのがあったらどうしよう？ もしこのなかに入っちゃったら、どこに行っちゃうんだろう？

「ブラックホールとか、そういうのじゃないの？」

本当のところ、意味はよくわかってなかったけど、そういつてみる。お兄ちゃんは、ちよつとだけ考えるようにだまつたけど、今度は身を乗り出した。

「見てみよう」

「っ？」

頭がくらくらした。正気じゃない。マンガとかの読みすぎなんだ、ぜつたい！

「やめようよ、なにかあつたらどうするの」

「平気だよ。ちよつと見るだけ」

お兄ちゃんが、細長い丸に顔を近づける。今度はためらわずに、ぐいと顔を突っ込んだ。

「おわ！」

お兄ちゃんがよろめいた。わたしは思わず、リュックサックをつかむ。

「お兄ちゃん！」

なにかに引つ張られるみたいに、身体が前のめりになった。それから、足が浮いたみたいになって、どっちが上なのか下なのか、よくわからなくなる。たぶん、宙返りしたんだと思うけど、どうなったのかはよくわからない。

「！」

「う、わー！」

わたしもお兄ちゃんも、上手に悲鳴をあげることもできない。もちろん、目だつて開けられない。ただ、浮いたんだと思つたのは一瞬で、ジュースの缶のなかに入つて思い切り振られてるみたいに、身体があつちこつちに行つたり来たりした。そういう、感覚になつた。

こわいとか、どうしようとか、そんな感情は追いついてこなかった。なにもわからなくて、ただ、お兄ちゃんのリユックサックに両手でしがみついていた。これだけは離しちゃいけないと思つた。急に、どすんと、衝撃がはしつた。

身体のどこから落ちたのかはわからない。でも、落ちたつてことだけはわかる。

世界が動かなくなつて、でも頭はくらくらして、なにがどうなつたのかわからない。しばらくたつて目を開けて、リユックサックの向こうにお兄ちゃんの頭が見えて、身体中の息を吐き出した。

よかつた。

本当はなにもよくなんかないけど、わたしはそれだけで、安心してしまった。

「いつてえ……なんだ、どうなつたんだ」

ネコみたいに頭を振つて、お兄ちゃんが起きあがるつとする。どうしてこういうことになつたのか、わたしはお兄ちゃんの背中の上に乗つかつてしまつていて、あわててどいた。

どこも痛くないけど、それつてもしかしてお兄ちゃんがクツションになつたつてことなのかな。でも、お兄ちゃんも、痛いっていつているわりには平気そうだ。

「ここ、どこだ」

ぼつりと、お兄ちゃんがつぶやいた。

わたしは、その声でやつと、いまがどういふ状況なのかを思い出す。そうだ、あの穴に入つちやつたんだ。

「……なにこれ」

そこは、まちががなく、あの細長い丸の向こう側じゃなかった。見知った公園ですらなかった。

わたしたちは、一面の白い花の上にあった。

見たことのない花だ。大きな白い花と、深い緑の、丸い葉。花も葉っぱも、なんだかきらきら光っていて、こわいぐらいにきれいだ。

「わたしたち、死んじゃったのかな」

死んだら花畑に行くって、なんかで読んだことある。たしか、花畑の向こう側に川があって、それは絶対越えたらいけないんだ。

「ばっか、そんなわけないだろ。死んでたら痛くねえだろ」

「でも、だつて、じゃあどこどこ？」

「落ち着けよ。落ち着け」

お兄ちゃんは、自分にいい聞かせるみたいだった。わたしの手を、ぎゅっとつかむ。

そうだ、落ち着こう　わたしは、息を思い切り吸って、できるだけゆっくり吐き出した。考えたくないけど、もし、もし本当に死んじゃったんだとして、それでもこうやってここにいるんだから、どうにかしなくちゃいけない。

「そうだ、あの丸いの、またあそこに入ったら帰れるんじゃないかな」

落ち着いたら、名案が浮かんだ。お兄ちゃんが首を横に振る。

「でも、ないじゃんか。それはむりだ。……たぶん、どっか別の場所に来ちゃったんだ。だれか人に会えれば、どこかわかるかも」

別の場所　つまり、ワープしちゃったってことだ。そんな夢みたいなお話、あるわけないよって笑いたかったけど、ここがあの公園じゃないのは本当だから、なんにもいえなくなってしまふ。

わたしは、ぐるりとまわりを見た。ずっと遠くのほうに、木がたくさんあるのが見えるけど、そこまではひたすら花畑だ。こんな広い花畑、テーマパークにだってない。上を見ると、空はちゃんと青いけど、雲はひとつもない。

これだけ広いのに、わたしたち以外にはだれもいなかった。だれ

かに会えれば、それだけで不安じゃなくなるのに　そう思って、あ、と思いつく。

携帯電話！

「お兄ちゃん、電話！　電話してみようよ！」

「あ、そっか、ケータイ！」

お兄ちゃんは急いでしゃがんで、花畑を探り始める。手を放しちやつてみたいだ。

でも、お兄ちゃんよりも、わたしが先に見つけた。花畑のなかで、ピンクに光るママの携帯電話。

期待に胸をふくらませて、通話ボタンを押そうとする。

けど、だめだった。

「圏外……」

もう、泣きそうになった。

「ちよつと貸してみろ」

お兄ちゃんが、わたしの手から携帯電話をさらつてく。真剣な顔で、ボタンを押し始めた。

どうするんだろう。圏外なのに。

ふしぎそうに見ていると、聞く前に答えてきた。

「ほら、ここがどこなのかわかるやつってあったじゃん。車のナビみたいなの」

「それって、圏外でも使えるの？」

「知らないけど」

そもそも、どのボタンを押せばできるのかもわからない。これでもない、こつちでもない、とあれこれ試すお兄ちゃんと一緒になつて、わたしも画面を見る。

いまのわたしたちにはこれしかなかったから、もうほかのことなんて、ぜんぜん見えてなかった。ずいぶん長い時間、夢中になつて、携帯電話をいじり続ける。

だから、いつのまにか、すぐ近くに人が来ていることにも気づかなかった。

「動くな」

突然、氷みたいに冷たい声が出て、わたしたちは本当に動けなくなった。

声は、すぐうしろから聞こえた。

「両手をあげて、ゆっくり、こちらを向け」

まるで、ドラマみたいなセリフ。逆らおうなんて思っはずもなかった。本当にドラマみたいに、ピストルがつきつけられてたらどうしよう。そんなことを思いながら、両手をあげ、恐る恐るふり返る。

「うわ！」

「……っ！」

お兄ちゃんは叫んだけど、わたしのは声にならなかった。

すぐ目の前にあったのは、ピストルじゃなかった。

剣。

まちがない。実物なんてもちろん見たこともないけど、ファンタジー映画なんかで見る剣の先っぽが、わたしたち二人からほんの数センチのところにあった。

それは、映画やテレビアニメで見て想像するよりも、ずっと大きくて、ずっと分厚くて、なんていうか……こういういいかたはおかしいけど、ずっと本物らしかった。銀色の刃は、ぴかぴかはしてなくて、ママが毎日必ずつけてる結婚指輪みたいにくすんでる。

だからこそ、使い込まれてるって感じがして、ぞっとした。

なにかの冗談ではないってことは、すぐにわかった。

「……ニンゲンが、この地へなんのようだ」

冷たい声がそう問いかけてきて、わたしはやっとその人物を見る。そしてすぐに、もうびっくりしすぎて、どうしていいんだかわからなくなった。

剣を片手でつきつけてきているのは、とてもきれいな女の人だった。茶色の布を巻きつけたかんたんな服を着ていて、肩や足はむき出しになっている。

でも、問題は、そんなことじゃない。

目を奪われたのは、耳だ。

頭の高い位置から、上に向かって伸びる、長い二本の耳。すすけてしまっているけれど、まるでおとなりの犬みたいにふわふわの、白い耳。

どう見ても、ウサギの耳だった。

わたしはわけがわからなくて　実は、それからどうなったのか、よく覚えていない。

　　なんだか、うしろから思い切り殴られたみたいに、どすんっていつのがあって、あとのことはわからなくなった。

　　どうやら、気絶しちゃったみたい。

## ハゼの家

【ハゼの家】 担当 空

オレは怒っていた。

混乱してたつてのももちろんだけど、それよりも怒っていた。つーかもう、怒ってないとやってられなかった。

いろいろ考え始めたら、オレなんかの頭じゃすぐにパンクしちゃうだけだ。

目を覚ますと、なんだか臭い部屋のなかにいた。暗くてよくわからないけど、物置みたいだ。すみっこには、切った木……薪っていうんだっけ、とにかくそれがたくさん積み上げられてて、なにが入ってるのかわかんないけど、ぱつと見は米袋みたいなのもいくつか転がってる。

部屋っていったけど、下はそのまま地面だ。倉庫っていったほうがいいかもしれない。

高いところに、ケータイくらいの大きさの穴（窓なのか？）が三つ。そこから光がちょっとだけ入ってきて、まだ気を失ってる桜の横顔が見える。

肌寒い。こんなところでいつまでもダウンしたら、風邪をひく。どうにかして起こしてやりたかったけど、呼んでも起きないし、両手両足がしばられてるから、カンタンにはいかない。

そう、気を失ってるんだ。

オレは見た。あの、ウサギの耳の変なやつが、桜の首のうしろをなぐったのを。それで桜は、気絶した。オレだってそうだ。

だから、オレは怒っていた。

どうして、こんなめに合わなきゃいけないんだ。

「……んー」

ぶつぶついつてたら、桜が起きた。日曜の朝みたいのにのんきに、

大きなアクビをする。

でもすぐに、真つ青になった。目をこするうにも、手が追いついてこなかったことで、手足がしばらくはられてる現状に気づいたらしい。きよるきよるとせわしなくまわりを見て、一気に泣きそうな顔になる。

「夢じゃなかった!」

「夢だと思ってたのかよ」

あきれた。でも、どこかケガをしたとか、そういうことはなさそうだ。

「わたしたち、さらわれちゃったの?」

そんなこと聞かれても。

「わかんねえよ」

そうとしかいえなかった。せめて、これ以上桜を不安にさせないように、できるだけ平気な顔をするので精一杯だ。

考えてしまったら、オレだって泣きそうだ。

そもそも、オレが塾をさぼったから、公園のおかしな丸いのにこだわったから

そう、あの、細長い丸。

あれを通って、ここに来た。

やっぱり、あの穴は、異世界につながってたんだ。

こんな夢みたいいな状況なのに、思ったほどわくわくはしなかった。マンガやゲームの主人公ならまだしも……だって主人公だとして、いきなりつかまったりするの?

もしかしたら、ものすごいヤバイことになってんじゃないか、これって。

「……おなかすいたね……」

桜がぽつりとつぶやく。そういえば、何時なんだろう。外はまだ明るいみたいだけど……いや、こっちと向こうの時間が一緒とは限らないか。

そういえばカバンのなかにお菓子をに入れてたな、と思ったけど、

カバンが見当たらない。没収されたらしい。

オレは、うつぶせに寝転がって、しばらくした手足を使って、イモムシみたいに前進した。出入り口っぽいのがぼんやりと見える。脱出できるなら、脱出したほうがいいだろう。

「やめようよ、じつとしどころよ」

「ばか、どうせ待ってても、来るのはウサ耳の剣持ったやつだぞ」  
オレの言葉に、桜はだまった。現実が見えたらしい。

どうにかトビラのところまで来て、身体をひねって起きあがる。ここまで来てしまうと、もうほとんど光が届かなくて、どこをどうやったら開くのか、まったくわからない。

「ねえ、開いてるわけないよ」

桜のものすごくもつともな声が聞こえたけど、もう引っ込みがつかない。開いてるかもしれないじゃんか。

桜になにかいい返そうとして、オレは固まった。

足音。

気のせいかと、耳をすます。気のせいなんかじゃない。足音が、近づいてくる。

「お兄ちゃん？」

「しー」

し、っていう自分の声の大きさに、しまったと思っただけど、いまさらどうにもならない。

足音が、トビラの向こうで止まった。カチャカチャ、となにかをいじる音。

ギィと、ゆっくり、向こう側が開けられる。光が差し込んできて、オレは思わず目を細める。

そこに立ってたのは、オレの想像してたのよりも小さいやつだった。

「わあ！」

エンリョがちに戸を開けて、そいつは悲鳴をあげた。目の前にオレがいたのが予定外だったらしい。

あわてて、そのまま半分ぐらい戸を閉めて、思い直したのか、もう一度恐る恐る開ける。目の前のオレと、奥にいる桜とを、まじまじと見た。

「やっぱり……」

なにが「やっぱり」なのか、口をぽかんと開けてまばたきもしないそいつを、オレだってまじまじと見た。

オレと同じぐらいの男の子だ。カーテンを巻きつけたみたいなの、変な格好。色白で、髪が金、目も青くて、日本人には見えない。そもそも、やっぱり頭のとっぺんからウサ耳が出てくるから、日本人とかそういう問題じゃないだろうけど。

「ええと……こんにちは。あの、だいじょうぶですか？」

さっきの、剣を持ったウサ耳とはちがって、こいつは話のわかりそうなやつだった。ほっとしたものの、どう答えたものかと、オレはだまってしまう。

まさか、だいじょうぶに見えてるんだろうか。

「だいじょうぶじゃない！」

オレが答えないでいると、うしろから桜が声をあげた。間抜けな返答だ。

ウサ耳男は、ちょっとほっとしたように息を吐き出して、それから今度はオレを見た。しかたないので、オレも続く。

「だいじょうぶに見えるか？」

だいじょうぶだなんて、ウソでもいえない。

「ですよ……でも、話してくれるみたいで良かった。では、いくつか質問するので、正直に答えてください。まず……あなたたちはニンゲンですか？」

オレは思わず、ふり返って桜を見た。さっきみたいに、答えるかと思ったんだ。けど、桜は、頭の上にハテナマークが見えるぐらいに、眉の間にシワを寄せてる。

ここはオレが答えよう。もしかしたら、ちがうっていったほうがいいのかもしれないけど、変にウソをつくのもあとがこわい。

オレはうなずいた。イエス。

「やっぱりそうなんだ……！」

そいつは目を輝かせた。さっきの剣のやつとは、だいぶ反応がちがうな。

「じゃあ、二つめ。あなたたちは、ぼくや、お姉ちゃんや……ええと、だれかに、危害を加えますか？」

オレは首を横に振る。ノー。

最後に 本当に、正直に答えてくださいね あなたたちは、

なんのために、ここに来たんですか？」

オレは、正直に、本当に正直に、疑問をぶつけた。

「つつーか、ここ、どこ？」

そいつは、目を丸くした。

\*

ウサ耳男は、ハゼと名乗った。

ねほりはほり聞いてくるので、オレと桜とで、起こったことをぜんぶ、できるだけいいねいに説明してやると、最終的にはオレたちのロープをほどき、あのホコリっぽい物置から出してくれた。

出てみると、オレたちが入れられてたのは、森のなかにある小さな小屋だった。去年の夏休みに、山で泊まったバンガローにちよつと似てるけど、それよりもずっと古めかしい。

そこから、林のなかのこぼこ道を数分歩いて、さっきよりも立派な小屋にたどりついた。

「どうぞ。こんなものしかありませんけど……」

ハゼは、オレたちを木のイスにすわらせて、マグカップ二つと、皿を一つ持ってきた。どっちも、木でできてるように見える。

マグカップからは湯気が出ていて、のぞき込むと、白い液体が入ってた。牛乳かな。皿には、パンらしいものが二つ。

「ありがとう、いただきますー！」

「あ、おい……」

止めようとしたけど、桜はあっさり両方に口をつけた。その顔が、すぐに笑顔になる。

「おいしいー！ これおいしいよ、お兄ちゃん！」

……なんてやつだ。こわいもの知らずっていうか……ふつう、もうちょっとケイカイしないか？

オレらを殴ってさらった女と、同じ耳のやつだぞ。

でも、桜がおいしそうに食べてるのを見てたら、オレだっておなかがすいてきた。すいてきたっていうか、本当はガマンしてたんだ。白い液体を見下ろす。そうだ、牛乳に違いない。ホットミルクってやつだ。

オレは目を閉じて、一気に飲んだ。

「……うまい」

いそいで、パンにもかぶりつく。ちっとも甘くないけど、こっちもうまい。

「お兄ちゃんったら、うまいとかいってたらまたママに怒られるよ。おいしい、でしょ」

だんだんペースを取り戻したようで、桜がいつもの小言をいつてくる。ハイハイ。

オレと桜は、二人であつというまに皿をカラにした。正直なところ、満腹にはほど遠いけど、それでもだいぶ満たされた。

見ると、オレらが二つしかないイスにすわってるからか、ハゼは壁側の背の低い棚に腰を下ろし、こっちを観察していた。なんだか、にこにこしてる。

「あ、ごめんなさい、わたしたちだけ。ハゼさんの分、ありがとうございました？」

桜が気を遣う。ハゼは首を左右に振った。

「いいえ、いいんです。ぼくはさっき食べたので。喜んでもらえてよかったです」

「あ、敬語なんてやめてください。わたしのほうが、たぶん年下だ

し」

桜は四年生のくせに、妙に世慣れてる。オレだったら絶対出てこないセリフだ。

「いえ、そんな、サクラさんのほうこそ」

「えーと……じゃあ、両方なしってことにしませんか？」

オレはだまつて、お互いゆずり合う二人をながめた。買い物先で見かける主婦の会話みたいだ。ヘンなの。

だいたい、ちょっと食いもんもらったからって、なつきすぎじゃないのか、桜のやつ。そりゃ、悪いヤツじゃなさそうだけど。

桜の提案に、ハゼは困ったように笑った。でも、いいかけて、それからだまつてしまったので、オレから話しかけることにする。

「なあ、オレらのことは、さっき話したのでぜんぶなんだけどさ。ここ、どこなんだよ。どうやってたら帰れるか、知ってる？」

「なんでお兄ちゃん、そんなにえらそうなの？」

桜が目を大きくして、余計なことをいってきたけど、無視。

オレはオレだ。それに、大きく見せといたほうが有利なんだ、こっぴつ場合。

「どこ、といわれても……なんていえばいいのか」

ハゼは、眉をぎゅつと寄せて、見るからに困り果ててしまった。まあ、たしかに、逆の立場だったら、オレだって困ると思う。

「……うん、あなたたちが、こことはちがうところから来たんだってことは、わかります……ええと、わかるよ」

桜の、ほとんどにらむような視線に負けて、あわてていい直す。

「着ている服も、持っているものも　あ、カバンのなか見ちゃったんだけど　、見たことのないようなものばかり。さっき話してくれたことが、うそだとも思えない。第一、二人は、ニンゲンなんでしょう？　こつち側に、ニンゲンが来るなんてこと、もうずっとなかったんだ。信じるよ。でも、ごめん、どうしてここにきてしまったのか、どうやってたら帰れるのか……そういうのは、さっぱり、わからないんだ」

オレと桜は、顔を見合わせた。

そうだ、最初に会ったウサ耳女も、人間がどうのつていつてた。ハゼにもあいつにも、ウサギの耳みたいなのがあるから、耳で見分けるってことなんだろう。それで、耳以外はオレらとほとんど変わらないように見えるこいつらは、人間ではないらしい。

でも、人間が存在しない世界ってわけでもなさそうだ。

「あの……わたしたちの世界では、こうやってお話ができるのは、人間だけなの。ハゼくんたちは、人間ではないなら、なんなの？」

この世界にも、人間はいるの？」

同じギモンを持ったらしく、桜が問う。ハゼは、ええ、とうなずいた。

「ぼくらみたいなのは、ビースルっていいいます。ビースルとニンゲンは……その、あんまり、仲が良くない。ニンゲンは、もちろんいるけど……というか、いると、いわれているけど。いまでは、こちら側には入ってこないはずなんだ、本当は」

ビースル……あたりまえだけど、聞いたこともない。

「なんで入ってこないんだ？」

「ケンカしてるから？」

オレと桜が口々にいう。答えは、ハゼからではなく、戸のほうから聞こえてきた。

「おまえたちが、愚かだからだ」

背筋が、ひやっとした。あの、冷たい声。

あいつだ。オレと桜を気絶させて連れてきた、ウサ耳の女が、入り口に立っていた。右手が、いつでも抜けるように、腰の剣を握っている。

「お姉ちゃん！」

お姉ちゃん？

桜が、オレの影に隠れるようにして、服のすそをつかんでくる。こいつは、不安になると必ずこうだ。

「さすが、ニンゲンはずるがしこいな。もう弟をたぶらかしたか。」

痛い目を見たくなければ、おとなしく、そのまま壁まで下がれ」

もう完全に、オレらを敵として見ている目だ。こんなあからさまな敵意を向けられたことなんてないから、オレだってひるんだ。けど、うしろに桜がいるし、なによりオレはこいつに怒ってる。ほとんど意地で、オレはヤツをにらみ返した。

いいなりになってたまるか。

「ちがうんだ、ぼくが勝手にやったことなんだ！話を聞いたけど、二人とも、お姉ちゃんが思ってるような、そんな人たちじゃないよ。ハゼが、オレらとヤツの間に立ち、両手を広げて説得しようとする。そいつは、ハゼと、オレらとを、じっと見た。だれもなにもしやべらない。息を飲むような沈黙が、ものすごく長く感じられる。やがて、そいつは、大きく息を吐き出した。頭からのびてるウサ耳も、疲れたようにだらんとおじぎする。

「……おまえまでそんなことをいうのか。だいたい、どうしてニンゲンがいるとわかった？」

……おまえまで？

「そんなの、お姉ちゃんがこわい顔で帰ってきて、それからすぐに正装して出かけたなら、おかしいなって思うよ。見たこともないカバンが二階にあったし」

正装、といわれて改めてみると、最初に見たぼろぼろの布きれじやなくて、きつちりした白い服を着ている。服っていつても、やっぱり布をまいたような感じだけど、腰布なんかもしっかりしていて、オレから見てもヨソイキってフンイキだ。

「二人がここに来ちゃったのは、偶然というか……ほとんど事故みだいだ。なにか目的があるわけじゃなくて、ただ帰りたいていつてる。だから、落ち着いて……ね？」

ハゼがそういったときには、そいつはもうだいぶ落ち着いてるふうだった。身体中の息を吐き出すみたいなため息をついて、腰の剣をはずし、戸の横に立てかける。

だまって歩いて、ハゼの隣をすぎると、オレの前に立った。右手

を差し出す。

「どうやら、そのようだ。プティ様にもその可能性を指摘された。

非礼を詫びよう。私はティーア。王室警護隊ハツティ隊長、  
ティーアハツティ。ハゼの姉だ」

なにをいつているのかはよくわからなかったけど、なんかすごい身分だつてことはなんとなくわかった。若そうなのに。

ちよつとためらったけど、しょうがないのでその手をつかむ。握手なんてめつたにしないから、なんか気恥ずかしい。

「相川空、です」

「相川桜です」

桜もうしろから顔を出す。にゅつと手をのばし、ちゃっかり握手した。

オレたちの世界のこと、こっちの世界のこと、そついのを話しているうちに、あつというまに日が暮れた。

話してみると、ぶっきらぼうだけど、ティーアも悪いやつじゃなかった。オレらを殴つて閉じこめたことを、何度もあやまってくれた。

夜は、ティーアがおわびにと、ホワイトシチューを作ってくれた。話している時間は忘れていられけど、シチューを食べたときに、桜がちよつと泣きそつな顔をした。たぶん、母さんの特製シチューを思い出したんだろう。

こっちの世界のこと　こっちの世界の、「ニンゲン」のこと。  
説明しといたほうがいいだろうけど、長くなりそうだから、それは桜にパス。

ともかく、こつして、こつちでの一日めが終わろうとしていた。

## 空と桜の冒険記録

## むこうの世界のこと

【むこうの世界のこと】 担当 桜

お兄ちゃんにパスされちゃったので、かんたんに書きます。

ハゼはなんだかいいにくそうにしてたけど、ティーアの話をもとめると、だいたいこんな感じ。

昔々、この世界には、ニンゲンとビースルという、二種類の「ヒト」が住んでいました。

ニンゲンは、どんどん暮らしを豊かにしようと思いました。そのためには、自然を壊すことも平気でした（これって、わたしたちの世界でもいっしょだと思う）。

ビースルは、お花や木々や、自然をできるだけ大切にしています。自然の流れのなかで生きていくためには、がまんも大事だっと思ってました。

なので、ニンゲンとビースルは、もともとあんまり仲良くありませんでした。

あるとき、ニンゲンたちは考えました。もっともっと、豊かになるには、どうすればいいだろう？

ビースルたちは、そんなニンゲンを笑いました。もうじゅうぶん豊かなのに、なんてばかなんだろう、と。

ニンゲンは、研究を重ねました。そして、とうとう、最高の豊かさを手に入れることに成功しました。

でもそれは　ハゼもティーアも、ここんとこくわしく教えてくれないけど　ビースルたちから見れば、とてもばからしい、そしてとても愚かな、「やっつてはいけないこと」でした。

なので、ニンゲンたちは罰を受けました。

いまでは、ピースルたちの暮らすところと、ニンゲンたちの暮らすところは、大きな壁で区切られていて、交流はまったくありません。

とにかく、ピースルはニンゲンを嫌っています。

以上！

あれ、わかりにくいかな。

とにかく、わたしたちが最初の日に聞いたのは、こつこつお話だった。実はこれ、あとからだいたい事情が変わってくるんだけど……それは、またあとで。

## お城のお姫様

【お城のお姫様】 担当 桜

ぜんぜん眠れないかと思っただけど、わたしもお兄ちゃんも疲れていたみたいで、ぐっすりと眠ってしまった。ふわふわのおふとんなかなくて、布を重ねただけのベッドだったけど、それでもすぐに寝ちゃったんだから、わたしたちってけっこうすごいと思う。

夜もぜんぜん寒くなくて、エアコンもないのに、快適といえは快適だった。ただ、寝るときに小さな虫が飛んでたのがすごくいやだったけど。

朝になって、パンとチーズを食べていたら、馬車が迎えに来た。感動する間もなく、頭から布をかぶせられて、よくわからないままに馬車に乗せられ、そのまま出発進行。

聞いてみてびっくり。行き先は「城？」

お兄ちゃんが、すごくいやそうな声を出した。

向かい側にすわるティーンアが、静かにうなづく。それで今日も、きつちりしたかつこうをしてるんだ。

お兄ちゃんがなんでいやがるのか、ぜんぜんわからない。わたしは逆に、わくわくしてきてしまう。

「お城があるんだ！ すごい！」

すぐに、テレビで見たヨーロッパの立派なお城を想像する。イメージはどんどんふくらんでいった。きつと、入り口を入ったら赤いカーペットが敷いてあって、ぐるぐるねじまがった階段なんかあって 根拠もなにもないけど、そんなことばかり考える。

「知らないから許されるというものでもない。くれぐれも、無礼のないようにしてくれ」

「勝手に連れて行かれて、なんでそんなこといわれなきゃなんない

んだよ」

お兄ちゃんは、むすつとしている。ほんと感じ悪い。

昨日話してみて、ティーアさんもいいひとだってわかったけど、お兄ちゃんはまだ許せないでいるのかな。

そのまま、二人ともだまってしまった。ハゼはお仕事があるっていつて 同じ歳ぐらいなのに、お仕事してるなんておどろいたけど  
ど おうちにおるすばんだから、馬車のなかは三人だけだ。ちょっと間が保たない。

昨日、ティーアは、わたしたちが帰る方法を知ってるかもしれないひとに会いに行くっていつてた。だからきつと、そのひとが、お城にいるってことだと思う。

帰る、という言葉が出てきたので、わたしはすっかり安心してしまつて、旅行みたいな気分楽しんでた。馬車だつて、見るのも乗るのも初めてだ。大きくてスマートな馬が二匹、わたしたちの乗ってる車を引つ張ってる。想像よりもずつと揺れて、ちよつと酔っちゃいそうだけど、そんなのがまんでくるぐらい、なんだかうきうきしてた。

窓には布がかけられていて、外が見えないのが惜しい。外から見えないように、つてことなのかもしれない。でも、おばあちゃんちに行ったときみたいな草のにおいがするから、きつと田舎道を走ってるんだろつな。

「サクラは楽しそうだな。不安はないのか？」

うきうきしてるのがわかつちやつたのか、ティーアがそんなことを聞いてきた。

「不安……は、もちろんあるけど。でも、考えてもわかんないことは、考えないの」

剣を向けられて、閉じこめられたときは不安で不安でしょうがなかつたけど、いまはあのときに比べれば、なんてことない。ティーアがいつしよだし、お兄ちゃんもいる。

「落ち込むよりはいいが、浮かれて耳を見せないように気をつけて

くれ。ハゼのように、ニンゲンに好意的なのは希だ。あいつは変わりものだからな。ほとんどのビースルが、私がしたように、武器を向けると思っておいたほうがいい」

「……う、わかった」

そうか、浮かれてちゃいけないんだ。

気を引きしめないと。この布、絶対とらないようにしよう。

「武器つて、みんな持つてるもんなの？ ティーアみたいに、ナント力隊長とかじゃなくても。ここつて、そんなに危なかったりするの？」

お兄ちゃんの質問に、わたしも思わずティーアを見た。

そうだ、武器。なんに使うんだろう？

ティーアは、なぜか、わたしたちの顔をじっと見た。それから、ため息を吐き出す。

「そうか、知らないんだ……。町に住んでいればほとんど安全だが、魔物が出ることもある。一般的には魔物と呼ばれるが、正式にはペルティスというやつらだ。本能的に私たちを襲う。一般人は武器を持たないが、私のように王室を警護する者や、森を行き来する者は、皆、なにかしらの武器を持っている」

淡々とされた説明を、もう一度頭のなかでくり返した。

……魔物、つていった。それつて、ゲームなんかに出てくるモンスターとか、そういうの？

「げ、じゃあ、もしかして昨日、オレらけっこうやばかったんじゃ」

「そうだよ、あのお花畑、あそこつて森のなかにあつたよね。ティーアのおうちだつて」

急に、うきうき気分がふっとんだ。ちっとも安全じゃないんだ、こつちの世界つて。

「家のまわりはだいじょうぶだが……そうだな、おまえたちがいたあたりは、少し危険だな」

そうなんだ……じゃあ、ティーアにつかまって、かえつてよかつたのかもしれない。得体の知れないモンスターにおそわれちゃうな

んで、ぜつたいいやだ。

わたしはなんだかしぼんでしまったみたいに、うつむいてしまった。とてもじゃないけど、外のおいを気にするとか、景色を見たいなとか、そんな気分じゃなくなってた。

ここは、わたしたちの世界よりずっと、危険な世界なんだ。

帰れる方法があっても、ケガしちゃったりとか、そんなことがあつたら、帰るところじゃなくなっちゃう。

わたしたちがここにいるのは、現実なんだもん。マンガやゲームじゃない。

「だいじょうぶだ。プティ様のもとにいれば、どこよりも安全だ。万が一のことがないよう、私も全力でおまえたちを守ろう。約束する」

重い空気に気づいたのか、ティーアがいつもよりも明るい声でいう。気を遣ってくれたみたい。

「そのプティサマっていうの、昨日も出てきたな。だれ？ 様ってぐらいだから、えらいひと？」

お兄ちゃんが、意外な記憶力を発揮する。そういえば、わたしも覚えてる。ティーアが「様」なんていうのがイメージに合わなくてあれ、って思ったんだ。

「いまから会いに行くお方だ。プティ＝G＝リユミエール……この国の、次期女王となるお方だ」

じょおう。

わたしは、ぽかんと口を開けてしまった。

次の女王様ってことは……いまは、お姫様？

すてき！

「お姫様に会えるの？」

これはもう、わくわくするなってほうが無理だった。だって、お城でお姫様に会うなんて！ 小さいころに夢見たこと、そのまんまだ！

ティーアは、そんなわたしを見て、優しく微笑んだ。お兄ちゃん

は、ますますいやそうな顔を隠そうともしない。

「……なんか、疲れそう……」

「そうかなあ？　なんで？」

この見解のちがいはなんだろう。

「さあ、もうすぐ到着だ。二人とも、フードをしっかり押さえて、頭を出さないように」

ティーアの声とほとんど同時に、馬車は止まった。

着いた場所はたしかにお城なんだろうけど、だいぶイメージがちがってた。

大きな門があつて、そこをくぐると長い道があつて、入り口には兵士さんとか立ってて、ごごごごって扉が開いて　なんていうのを、想像してただけけど。

「裏口……」

思わず口から出た。

考えてみれば、あたりまえだ。こんな、布をかぶった怪しいことも二人、堂々と正面から入れるわけがない。

馬車から降りると、すぐ目の前に、てっぺんが見えないぐらいの高い高い石壁。実はこれ、城の外壁らしいけど、こんな近くからじや外観なんてぜんぜんわかんない。下は芝生で、うしろのほうにはやっぱり石の壁が見える。馬車は、裏門から建物のすぐ近くまで入ってきたみたい。ここは、裏庭つてことなのかな。

外壁の下のほうに、草むらに隠れるようにして、小さな入り口があつた。身体を縮こまらせ、もそもそと入る。入ったっていうか、なんかもうどろぼうの気分。入った向こうも、真っ暗でなにも見えない。

「もしだれかとすれ違うようなことがあつても、顔を上げ、堂々としていきな。ただし、フードだけはくれぐれもとらないように」  
小声でそういわれたけど、それってけっこう難しい注文だった。  
てるてる坊主みたいになかつたころなのに、堂々としろっていわれても。

「暗いし……寒い。なんだここ」

お兄ちゃんが不満をもらす。

何度かまばたきをしているうちに、だんだん目が慣れてきた。たくさん箱が、いくつもいくつも積み重ねられている。最初にティアアに入れられた場所とはふんいきがちがうけど、ここも物置みだ。壁が石だからか、ひんやりとしていて、お兄ちゃんのいうとおり、ちよつと寒い。

「静かに。声を出すな」

ささやくような声で、でもぴしりと注意して、ティアアはずんずん進んでいく。わたしたちは、しーつと指を立てて、抜き足差し足ついで行く。あんまり大きな部屋ではないみたいで、すぐにドアのところまできた。ティアアはドアに耳をくつつけて、そのまま動かなくなる。

わたしは、ちらりとお兄ちゃんを見た。馬車のなかではつまらなそうだったけど、いまはまんざらでもなさそうな顔をしてる。

だって、ここって、まるでお兄ちゃんがやってるゲームに出てくるお城みたいだ。わくわくしないはずがない。

「行くぞ」

ティアアが、そつとドアを開けた。まぶしいほどではないけど、いままでが真つ暗だったから、入ってきた光に思わず目を閉じる。

ティアアはするりと向こう側へすべり出た。わたしたちも、あわてて出る。すぐにドアを閉めて、なにごともしなかつたように歩き始める。

「すごい……！」

思わず声になってしまつて、口をおさえた。

だって、映画で見るとは別の光景だ。長い長い廊下、深い赤色のじゅうたん、石の壁にはろうそくが灯されていて、ときどき花や絵も飾つてある。ちよつと歩いてしまつたら、もうわたしたちがどの部屋から出てきたのかわからないくらい、同じようなドアが等間隔に並んでいる。

こんなにたくさんさんの部屋、なにに使うんだろう？

「……そんなたくさんひとが暮らすもんか、城って？」

お兄ちゃんが、こそこそと話しかけてくる。同じことを考えてたみたい。

「ね、王様とか女王様だけじゃないんだね」

「料理するひととか」

「あ、そういうひとたちも？」

「ごほん、とティーアがせきばらいをした。しまった。

わたしたちは、いいつけを思い出して、むんと胸をはった。堂々と、堂々と。緊張するどころか、なんだか笑いそうになってしまったけど、気むずかしそうな顔を作ってえらそうに歩いていく。

廊下の向こう側から、だれかが歩いてくるのが見えた。おじさんが、二人。二人とも、白くて長い、だぼだぼの服を着ていて、背の高い帽子をかぶってる。

一人は長いあごひげがあって、なんだか身分の高そうな感じがした。もう一人は、あごひげの人よりもちよっとうしろを歩いている。

なんとなく、ほんとうになんとなくだけど、校長先生と教頭先生って感じ。なんだか、いばってるっていうか。

すれ違つとときに、ティーアが頭を下げた。わたしとお兄ちゃんも、同じように頭を下げる。

「ティーアハッティ」

すれ違つたあとで、うしろから声がかげられた。

ティーア、お兄ちゃん、わたしの順に歩いていたので、聞こえてきた声がすごく近くて、わたしはびくりとしてしまう。

低い、やっぱりえらそうな声だ。わたしがふり返れないでいるのに、お兄ちゃんはすぐにこっちを見る。ティーアが足を止め、身体ごとうしろを向いた。

「なんでしよう、シユークルト様、アラীগ様」

ティーアはすごく自然なのに、わたしはやっぱりさっきの男の人たちを見ることができなくて、心臓がときどきいつてるのが聞こえ

そうならいだった。人間だつてばれたら殺されちゃう、とそればかりを考えてしまう。

せめて怪しまれないように、じっとしてないと。

「そちらのお二方は？」

「！」

やっぱり、と思った。どうしよう。どうしよう。どうしよう。

でも、ティーアの声は、とつても落ち着いていた。

「プティ様のご命令で、町のこどもを連れて参りました。……お察しください、どうか、「ご内密」」

「姫様の？ なるほど、またか……困ったものだな。くれぐれも、姫様のお身体に障ることのないように」

「もちろんです。では」

くるりと前を向き、なにこともなかったように歩き始める。お兄ちゃんがわたしの手を引いて、やっと我に返つて、わたしもあとに続く。

まだ、うしろから見られてるような気がした。会話は聞こえていたけど、内容までは頭に入っていない。困ったものだっていった。なにが？ どうして？

頭のなかが真っ白なまま、お兄ちゃんの手だけをたよりに歩き続けて、いつのまにかゴールについた。なんだか、ずいぶん長い距離を歩いたような気がする。階段もたくさん登ったような。

「失礼します」

ティーアが一言そう告げて、ほかよりも立派な、大きな大きなドアを開ける。

うつむいてたわたしの目に映ったのは、白いふわふわのじゅうたん。甘いようなにおいがただよってくる。

なかに入つて、ティーアがドアを閉める。

初めて顔を上げて、わたしは声を失った。

「すげえ……！」

お兄ちゃんですえ、そうつぶやいてた。

白いじゅうたん、白い壁、白い家具……そして、大きな大きな白いベッド。ベッドの上には、白いレースがはためいてる。知ってる、これ、テンガイつきベッドってやつだ。

イメージしてたとおりの、お姫様の部屋　そして、ベッドの上  
に上半身を起こしている、銀色の髪の女の子。

「ごくろろさまです、ティーア。始めまして、旅人さんたち」

女の子は、オルゴールの音みたいなきれいな声でそういって、上品に目を細めた。いわれなくてもわかる。この子が、プティ様なんだ。

「二人とも、もうフードを取っていい。プティ様に、ごあいさつを」  
わたしは緊張してしまって、部屋に入ってすぐのところから動けなかった。お兄ちゃんが布を取るのを見て、あわててわたしも取っただけど、はじめまして桜です、なんてのんきにいう気にもなれない。だって、見るからに、「お姫様」だった。

ふわふわの髪の毛はきらきらしてて、腰よりもまだ長い。ここからはけっこう距離があるのに、まつげが長いのがわかる。白い、つやつやの服は、レースの布　薄そうだけど、おふとんなのかなに隠れてしまって、腰から上しか見えないけど、それを着てベッドに入るなんてわたしにはぜったいむりってぐらいにきれいで、まるでドレスみたいだ。

髪の毛で見えないけど、やっぱりわたしたちと同じ位置には、耳はないみたいだった。だって、頭の上から、ねこみみたいな三角の耳が顔を出してる。

まぶしいものを見たみたいに、なんだかくらくらしてきた。

わたしよりも年下に見えるのに……どうやって育ったら、こういうふうになるんだろう。

「二人とも」

ティーアに急かされて、助けを求めようとお兄ちゃんを見る。お兄ちゃんも、ぽかんと口を開けて、プティ様に見入ってた。そうだよ、そうなるよね。

「ごめんなさい、わたくしはここから動けないのです。もっと近くに、来ていただけますか。ええと……なんとお呼びすれば良いでしょうか？」

プティ様が、首をかしげるようにして聞いてくる。

このままじゃいけない。これってきつと、気を遣わせてるんだ。

「桜、相川桜です。お兄ちゃんは、相川空。桜、空って、呼んでください！」

近くに来てっついていわれたのに、その場で声を張り上げてしまう。

いってしまったから急に恥ずかしくなって、耳のあたりが熱くなるのを感じた。わたしいま、きつと真っ赤になってる。

「サクラ、ソラ……すてきな名前ですね。どうぞよろしく、サクラ、ソラ。わたくしのことは、どうぞ、プティと」

そういって、プティ様はにっこりと笑った。

その笑顔に、金縛りから解けたみたいなお気分になる。なんて優しく笑うんだろう。

「よろしく、お願いします」

「どうも」

お兄ちゃんはぶつきらぼうに、でもちよつと照れたみたいに、そうあいさつをする。

「では、茶でも入れよう。ソラ、そっちのイスを、プティ様のベッドのそばに。サクラはこっちを手伝ってくれ」

「あ、うん！」

そうやって指示を出してもらえるのは、ありがたかった。私たちはティーアにいわれるままに、お茶会の準備を始めた。

プティ様……じゃない、様をついたら怒られちゃうから、ここからはプティにするけど　プティは、病気らしかった。

生まれつき身体が弱くて、ここ数年で悪化したみたい。最近ではほとんどベッドから起きられなくなったんだとか。

一日中、ただ部屋にこもっている生活に耐えきれず、ほとんどを

城の外で過ごすティアーアに頼んで、ときどき町のこどもを話し相手として連れてきてもらってるらしい。それで、さっきのえらそうな二人組との会話も納得できる。

ティアーアの用意してくれたのは、ハーブティと甘いクッキーだった。町で買ったものをわざわざ持ってきたみたい。ベッドの横にイスを三つ運んで、わたしたち三人がそこに座る。プティのベッドには、ベッドの幅にちょうど合うように作られてるテーブルをセット。そこにトレイを置けば、お茶会の準備は万端だ。

ときどきこうやって、お茶会をして、気を紛らわしているみたいだけど……それにしたって、一日中ベッドの上にいる生活なんて、想像しただけで気が滅入っちゃう。

学校もなくて、もちろんテレビもゲームもマンガもなくて。わたしなんて、風邪で一日学校休んだだけで、ひまでひまでしようがないのに。

「プティは、わたしたちが人間でも、なんとも思わないの？」  
そんな話をして、ちょっと慣れてきたから、ずばり聞いてみた。  
だって、変だもん。ふつうは、人間だっればれたら武器を向けられる、なんてティアーアはいつてたのに。

「あら、だって、わたくしたちのいう『ニンゲン』と、あなたたちはちがうのしょう？」

プティは目をまたたいて、ふしぎそうにいう。そっか、この子はわかってるんだ。わたしたちが別の世界から来たんだって。

「ここが別の世界につながってて、オレらがそこから来たんだってこと、あんたは知ってたってことだよな。いや、っていうかそもそも、オレらが来ること、わかってたってこと？」

最初は緊張してたお兄ちゃんも、もうこの口のききかただ。ティアーアが不機嫌そうにお兄ちゃんを見て、わたしのほづがはらはらしてしまう。

あんた、っていうのはどうかな……。お姫さま相手に。  
でも、お兄ちゃんのいってることは、わたしも気になってること

だった。それよりも、いちばん聞きたいのは、

「わたしたち、どうやってたら帰れるの？」  
ってことだ。

わたしとお兄ちゃんとで、真剣な目でプティをじつと見る。プティは、わたしたちとは時間の流れがちがうみたいにゆっくりまばたきをして、ええと、と口を開いた。

「どこから、お話すればよいでしょうか……。あなたがたの世界にも、昔からいつたえられているお話というのは、ありますか？」  
……いつたえ？

「昔話とか、そんなん？ 桃太郎とかかぐや姫とか」

お兄ちゃんがわたしに聞いてくる。

「え、そういうのでいいの？」

「いいんだろ、すっげえ昔からあるんだぞ、ああいうの」

なんだか自信ありげだ。わたしも、ママも、おばあちゃんもそのママも、みんなが知ってるんだから、いつたえってことに………なるのかなあ？ どうなんだろう？

「こことはちがう世界のお話が、いつたえとして残っているんです。別の世界からやってきた、旅人のお話。わたくし、ティーアからあなたがたの話聞いたときに、ぜったいそうだって思いました。だって、ずっとずっと、会ってみたかったですもの」

「そのようないつたえ、聞いたことがありますか？」  
ティーアが無表情で水を差す。え、そうなの？

あ、でも、ティーアが聞いたことがあったら、そもそも最初に剣を向けられることもなかったのかな。

プティは、もちろんです、とうなずいた。

「これは、王族のみに伝えられています。いつたえというよりは………そうですね、記録として残っているといつたほうがよいでしょうか。昔、わたくしたちの祖先はふしぎな力を使えたのだと思います。そのふしぎな力で、こことはちがう世界から、旅人を招いたのだという記録があるのです」

「召還つてやつだ」

お兄ちゃんが、ゲーム用語を持ち出す。

わたしもお兄ちゃんがやるゲームをいつも見ているので、召還つていうのは知ってる。魔法使いが、他の世界からお役立ちキャラクターを呼び出すつてやつだ（……と思う、たぶん）。

「まあ、あなたがたの世界には、そういう秘技があるんですか？」  
プティが目を輝かせて聞いてくる。わたしはお兄ちゃんをひじでこづいた。

「いや……オレらのほうにも、そういうイイツタエが  
てきとうなこといつてるなあ。」

「わたくし、どうしてもちがう世界のかたにお会いしたくて、毎日お祈りしていました。ですから、ティーアの話聞いたときには、とうとう願いが通じたのだと　もしかしたら、大昔に途絶えたはずの王家の力が、わたくしに備わっていたのかもしれないと　そのように思ったのです。会えてよかった、ソラ、サクラ。あなたがたの世界のお話、たくさん聞かせてくださいな」

「それは、いいけど……」

でもそれって、あいまないいかただ。

そういう力が備わっていたのかもれない、ってことは、プティが自分でわたしたちを呼んだのかもしれないし、そうじゃないのかもしれないってことだ。

「……要するに、帰れるの？　帰れないの？」

いちばん聞きたいことは、やっぱりこれしかない。

「記録には、旅人たちは帰っていったとあります。ですから、だいたいよぶです。急がずとも、きつと、帰れます」

そのやわらかい笑顔は、かわいいんだけどやっぱりどこかはかなげで、わたしもお兄ちゃんもなんだか強くいうことができなくなりました。

きつと、じゃ困るんだけどな。

「……帰れるのが何十年も先で、それまでにオレらはじーさんばー

さんになるとかき。そうでなくても、二、三日で帰って見たら、向こうの世界では何百年も経ってました、とかだったりしてな」

そんなこわいこといわないで欲しい。わたしはお兄ちゃんをにらんだだけで、返事はしないことにする。

「プティ様がだいじょうぶだとおっしゃっているんだ。きっと、そのうちには帰れる。あまり気をもむな。おまえたちは、帰れるその日まで、無事であることを考える。ニンゲンであることを外部に気づかれないように、あたりまえだが、病などにならないように」

ティーアが淡々と、でもちよつとこわい声でいうので、もうそれ以上にもいえなくなつた。わたしとお兄ちゃんは顔を見合わせて、しようがないか、と納得した。

以前にも、わたしたちみたいにこの世界に来た人がいて、その人はどうやら無事に お兄ちゃんのいうように、何年後とかはわからないわけだけど 帰つたらしいということは、わたしたちにずいぶん勇気を与えた。

うん、きつとだいじょうぶ。

だって、考えたつてしようがないもん。あれこれ考えて、ティーアのいうように病気にでもなつたら意味がないし。

とりあえず楽しもう！

そう決めて、もう一度プティを見ると、青白い顔ながらとても嬉しそうに微笑んでた。わたしもなんだか嬉しくなつて、笑顔を返す。

この子とは、いいおともだちになりたいな。

それから、ティーアがこっそり持ってきてくれたわたしたちのバッグを開けて、教科書やゲーム機なんかを見せてあげると、プティも、ざつとしか見てなかったらしいティーアも、とてもおどろいてた。お兄ちゃんのゲーム機を見たときは、プティなんてびっくりしすぎて泣きそうになつたぐらいだ。こんな小さなものが光って音を出すつてことが、こわいみたい。

こっちの世界では、だれもが教育を受けるわけではないらしく、わたしとお兄ちゃんが毎日学校で勉強していることをいうと、とっても尊敬された。あたりまえだと思ってたけど、これってすごいみたい。ご両親に想われているんですね、って……勉強することが？なんだか変な感じ。

お兄ちゃんのカバンにあったソフトキャンディを二人が食べたときには、思わず笑っちゃった。だってティーアったら、すごい顔して吐き出しちゃったから。でもプティは、おいしいおいしいって、喜んで三つも食べてた。

プティはなんでもかんでも知りたがって、話しているうちにパパやママのことを思い出して、わたしはなんだか寂しくなっちゃったけど、でもがまんした。

こうして話していると、いろんなことを考えずにすむし、なにを聞いても目を丸くしておどろいてくれるプティを相手にするのは楽しかった。

このときは、こっちの世界でも、なんだかやっていけそうな気がしていた。

わたしもお兄ちゃんも、たぶん、考えが足りなかったんだ。

## 森のなか

【森のなか】 担当 空

おひめさまの相手は桜にまかせて、オレはまた八ゼのところに戻ってきていた。

あんなきらきらしたところは苦手だったし、やっぱりプティ相手じゃなんか緊張する。話し相手が欲しいってことだけど、そんなの桜でじゅうぶんだろ。オレがいたって、たいした話はできない。

オレだけでもどるっていったら、ティーアは不安そうにしてたけど、でも頼み込んで連れてきてもらった。いっしょにいるなら、だんぜん八ゼのほうがいい。

そんなわけで、桜とは別々に過ごし始めて……もう、一週間ぐらいになるかな。こっちの生活にも、それなりに慣れてきていた。

「ソラ、準備はいい？ そろそろ行くこうか」

八ゼが、いつもどおり大きな布の袋を肩からさげて、オレを呼んだ。オレは、壁にひっかけてある布を取って、頭にかぶせる。布の下にリュックもしよって、準備オーケーだ。

「今日はちよつと遠くまで行くから、パンを持っていこう」

そういって、食料庫からパンを持ち出し、布で包んで袋に入れる。最初は味気なく思ったけど、自家製だっというパンはなかなかおいしくて、この世界で一番気に入ってるものはって聞かれたら、オレはパンと答えるかもしれない。しかもこれ、八ゼが焼くんだ。すげえ、オレにはぜったいムリ。

八ゼの仕事というのは、この辺りの森のパトロールらしい。町ではなく、わざわざ森の入り口に住んでいるのは、ティーアと二人、「守人」としての役割が与えられているからだとか。ただ、八ゼは、安全なところを見て回り、おかしなところがあつたらティーアに報告する、という役回りらしいけど。

その話を聞いて、オレは毎日、ハゼにくつついていっしょに見回りをすることにした。家にこもってもつままないし、うろつろしてれば、公園で見たような入り口を見つけることができるかもしれないからだ。

「壁のほうまで行くから、けっこう歩くよ。ソラ、平気？」

ハゼの家を出て、森のなかを歩き始めてすぐ、心配そうに聞いてくる。オレは苦笑いした。

「だいじょうぶ。もう、歩くのもだいじ慣れた」

最初は、ちよつと歩いただけで　ちよつとってというのは、ハゼの基準でのちよつとだけど　もう息があがつてつらかったけど、もうだいじ慣れてきていた。考えてみれば、向こうにいたときは、そんなに歩いたことなんてなかったんだ。塾だって、帰りは母さんが迎えに来てくれてたし、ちよつと距離があるところでも、電車やバスがいくらかもある。

向こうに帰ったら、もう少し歩くことにしようかな。

たわいのない話をしながら、オレからしてみればどう進んでるんだかわからない森のなかを、どんどん歩く。ハゼの頭のなかには、このあたりの地理は完全にインプットされていて、モンスターの出ない道を選んで進んでいるらしい。

出ないっていつでも確率の問題で、出たら逃げるしかない、ってことらしいけど。できれば、出会いたくないもんだ。

どれぐらい歩いただろうか。そのうちに、白い花畑にたどりついた。

「こっつて……」

見覚えがある。大きな花と、丸い葉っぱ。

「どうしたの？　ちよつと、休憩する？」

「いや、そうじゃなくてさ。こっついう花畑、ここ以外にもある？」

ハゼは、首をかしげた。

「こっついうって、この花のってこと？　だったら、ぼくは、こっしか知らないかな」

……じゃあやっぱり、オレらが最初に来たのはここなんだ。

どうして思いつかなかったんだろう。最初に来た場所なら、あの細長い丸はここにつながってたってことだ。ってことは、またここに、入り口が現れるかもしれないのに。

そのことを話すと、ハゼは難しい顔をして考え込んでしまった。

「うーん……どうなのかな……。ソラが話してくれた、プティ様の話が本当なら、やっぱりプティ様頼みになっちゃうような気がする。自然に起こったことなら、またここからってこともあるかもしれないけど……。プティ様が二人を呼んだんでしよう？」

「でしょ、っていわれてもな……」

やっぱり、それがはつきりしないってのは問題だな。

「ぼくは、もうちょっとソラたちにくっついて欲しいけどね」

笑いながらそんなことをいって、ハゼは、花畑のなかに足を踏み入れた。しゃがみこんで、ていねいに一輪一輪物色し、葉っぱだけをいくつかを袋に入れていく。

「それ、どうすんの？」

オレも花畑に入る。びっしり花が生えてるから、どうしてもちよつと踏んじやうけど。

「うーん……。ソラになら、教えてもいいかな。お姉ちゃんには、ぜつたいに内緒だよ」

ハゼから、そんな言葉が出てくるのは意外だった。

「なんで？」

「この花ね、実はぼくが植えたんだ」

声をひそめるようにして、そつと告げる。ものすごく重大なヒミツを打ち明けたみたいな感じだけど、なんでそれが「内緒」なのかなぜんぜんわからない。

もしかして、勝手に花を育てちゃいけないとか、そんな決まりでもあんのかな。

「……なんで？」

なので、もう一回聞いた。ハゼは、オレの質問の意味を少し取り

違えたみたいだった。

「この葉っぱから取れる液が、病気に効くんだ。熱を下げる効果がある。だからこうやって、こっそり育ててるんだよ」

オレは素直に驚いた。薬草ってやつだ。取れる液がってことは、薬をハゼが作ってるってことだろう。

「すげえ！　なんかそういうの、かつこいいな！」

なんだかわくわくしてきて、思わずはしゃいでしまう。でも、ハゼはオレよりももっとおどろいて、こっちを見た。

「……なんとも思わないの？」

「なにが？」

わけがわからない。そうだ、そんなすごいことなのに、ヒミツにする理由だつてわからない。

「ひょっとして、ソラたちの世界では、こういうの、あたりまえなの？」

おそろおそろ、聞いてくる。

「こういうのって……自分で薬草探すなんてこと、しないよ。あ、でもばあちゃんは、ヤケドしたときになんかの草をはっつけてくれたっけ。ふつう、薬は薬局で買う。それが、病院に行くか」

「ヤツキヨク……で、買う？　ビヨウイン？」

今度は、オレがおどろく番だった。

もしかして

「病院、ないの？　風邪ひいたり……ケガしたりとかさ、そういうとき、ハゼたちはどうすんだよ」

「ソラたちはどうするの？」

質問で返されてしまう。オレが聞きたいのに。

「だから、病院に……病院ってところにいって、先生に診てもらうんだよ。で、注射されたり、薬もらったり。そうすれば、そのうち治る。注射は痛いけどな」

オレの言葉に、ハゼは電池が切れた人形みたいに止まってしまった。数秒後に、大きなまばたきを一回。

それから、急に、ハゼの目がきらきらと輝きだした。

「すごい……！ そうなんだ、やっぱり、そうなんだ！」

両手を握りしめて、なにやら感動してる。オレは完全においてけぼりにされた気分だ。

「だから、なにが？ ハゼたちは、病気になったら、どうするんだよ？」

「寝るんだよ」

あたりまえのように答えられて、オレは拍子抜けしてしまう。

寝るって。そんなの、オレらだって寝る。

「そうじゃなくて……寝てるだけはなかなか治らないような、ひどい病気とか……そうだ、ケガなんかは？」

「すり傷や切り傷に塗る、かんたんな薬はあるよ。でも、病気は別なんだ。寝るしかない。病気に薬っていう考え方は、ぼくらにはないんだ」

「……は？」

もう、ぜんぜん話についていけなかった。

薬がないんじゃないかって、薬っていう考え方がない？

病院も、医者も、そもそも存在しないってことか？

「あんまりひどい病気のときはね、これはそれなりに裕福な家庭にしかできないことだけど、お城に行つて、ラ・ディオス様とプティ様に治してもらうんだ。シューケルト様 あ、最高位の神官様の名前なんだけど のありがたいお話を聞いて、プティ様に触れてもらう。そうやって、治すんだよ」

……プティ？ あの、貧弱そうなオヒメサマが？

「プティが、病気を治すのか？」

「王家の血を引くピースルには、そういう力があるんだって、みんな信じてる」

そのいい方が、妙に引つかかった。

「ハゼは、信じてないって感じたな」

「だから、内緒なんだよ。ぼくの考え方は、そのまま、王家への反

逆罪だ」

「叛逆罪って……なんで？」

「そうやって考えることが、もう罪ってことか？」

「なんだそれ。よくわかんないけど、おかしいってことはなんとなくわかる。」

「それに、プティが触るだけで病気が治るって話も、いかにもうさらくさい。」

「この国を守っているのはね、ラ・ディオス様っていう神様と、その恩恵を授かっている王家のかたたちなんだ。王家のピースルが病人に触れば、病が消えるって、ずっと昔からいわれてる。でも、もし……本当にもしもの話だけど、考えてみてよ、もしソラが重い病気にかかって、プティ様のところに行くとするよね。触れてもらって、それでも病気が治らなかつたとする。治りませんでしたって正直にいったら、どうなると思う？」

「オレは、その状況を想像してみた。」

「オレには、あのオヒメサマが触るだけで病気が治るなんて思えない。まあそれはともかくとして、触ってもらっても治らなかったとする。それをいったら……」

「……どうなるんだ？」

「答えないでいると、ハゼは、ちょっと影のある笑みを見せた。」

「叛逆罪で殺されるだろうね。治らないなんて、王家を信じていないからだ、ラ・ディオス様への信仰心が足りないからだ。そういうことになるんだ。だから、治ってなくても、ありがたがって帰るしかない」

「なんだそれ？」

「オレは思わず叫んでいた。」

「そんな変な話、あっていいの？ だいたい、病気なのに城まで出かけるってのも、おかしい。」

「そうか、そういう反応になるんだね。ぼくだけが、おかしいことを考えてるのかと思ってた」

「そんなの、ほかのヤツだっておかしいと思ってるだろ。プティに触られたって、だれも治らないんだから」

「でも治るひともいるんだ。城に行けるぐらいだから、そこまでの重病ではない場合も多いしね」

オレは、なんだか悔しいような気分になっていた。そんなの、ぜったいに変だ。きつと、おかしいって思っているヤツがいても、ハゼみたいに口に出せないってことなんだろう。

それをいったら、罪になってしまうから。

オレらの世界では、考えられないことだ。

「……でも、母さんは、治らなかつたんだ」

うつむいて、ぼつりとハゼがつぶやいた。

そうだ、ハゼはティアと二人で暮らしてる。両親はどうしたんだろうって、思わなかつたわけじゃないけど……

「……病気で死んじゃったのか？」

聞いてから、しまったと思う。こんなこと、聞くべきじゃないのに。

「もう、何年も前にね」

ハゼは、こっちを向いて、わざと笑って見せた。オレの動揺を感じたんだろう。

「母さんはお城で働いてたから、お金はなかつたけど、特別にプティ様に触っていただいたんだ。治らなかつたけど、母さんは信仰心の強いひとだったから、そんなはずないって、そのまま働き続けた。それで、死んじゃったんだ。……ぼくがおかしいと思いはじめたのは、そのときからだよ。それまでも、疑問はあつたけどね。ぼくは、ニンゲンの書物を読んでいたから」

「ニンゲンの？」

うん、とうなずいて、ハゼは花畑にすわりこんだ。オレも、そのとなりに腰を下ろす。

「これこそ、ゼツタイに、だれにも内緒だよ。見つかったらこわいから、いつも持ち歩いてるんだ」

そういつて、袋を開ける。布にいてねいに包まれた、四角いものを取り出した。

「小さいころ、取り壊される前の廃墟でね、偶然拾ったんだ。これを読むために、文字も少し勉強した」

それは、本だった。

辞書ぐらいの大きさだ。図書館の奥からひっぱりだしてきたような、古そうな本。

開いて見せてくれたけど、花や草の絵がたくさん載ってて、図鑑みたいに見える。文字は……日本語ではない。まるで英語みたいだけど、これが英語なのかどうなのかはよくわからない。

「ここには、いろんな薬が載ってる。びっくりしたよ。びっくりして……ニンゲンってすごいなって、思っちゃいけないことを思った。でもいまは、素直に、すごいと思ってる。彼らは、やりすぎてしまったけどね」

「やりすぎた？」

聞き返しても、ハゼはあいまいに笑っただけだった。気にしてなかったけど、最初にこっちの世界のニンゲンのことを聞いたときも、くわしいことは教えてくれなかったんだ。

ニンゲンが、なにをしたっていうんだ？

はぐらかされるかもしれないけど、それでも聞いてみようよ、ハゼを見る。でもそのときに、オレは、気づいてしまった。

ハゼよりもずつとうしろ　森のなかから、なにかがぬつと顔を出すのを。

息が止まるかと思った。

明らかに、ニンゲンでもビースルでも……それから、森の動物のたぐいでもなかった。

ひとつのかたちをしている。でも、なんていえばいいだろう、頭からどろどろの液体をかぶったみたいに、あちこちから液がしたたっている。灰色の、動くもの。

声も出せないでいると、様子がおかしいと思ったのか、ハゼが急

いでうしろを見た。

「ペルティスだ……！」

ペルティス？ ああ、そうだ、ティーンアがいった。こいつが、そのモンスターなんだ。

そいつは、ゆっくりとこっちを向いたようだった。ぴたりと、動きが止まる。目があるはずの場所も灰色の液体におおわれて、どうなってるかはわからないけど、たぶんオレらを見たんだろう。それから、こっちに向かって、のっそりと歩き出す。

風が吹いて、これだけ遠いのに、なにかが腐ったようなイヤな匂いまでしてきた。

胸のあたりが、急に寒くなる。恐怖だ。

「ソラ、立って。急いで逃げよう。走ればだいじょうぶ」

小声でささやいて、ハゼがオレの手を引く。

でも、オレは動けなかった。

金縛りにあったみたいに、そいつから目が離せないでいた。

ゆっくり、ゆっくり……でも確実に、そいつが近づいてくる。

「ソラ！」

鋭く呼ばれて、やっと我に返る。立ち上がり、走り出した。

「ソラ、待って！ 勝手に行かないで！ やみくもに進むのは危険だ！」

すぐうしろから、ハゼの声が聞こえてくる。いつてることもわかったけど、でも足は止まらなかった。逃げなきゃ、逃げなきゃと、それしか考えられなかった。

うしろをふり返ることもできない。ヤツは追ってきているだろうか。止まったら追いつかれるんじゃないか。追いつかれたら、追いつかれたら

オレは、とにかく走った。走って走って……どれぐらい走っただろう。

突然森が途絶えて、目の前に白い壁が現れて、立ち止まった。

「ちよ……、も、もう、追ってきてないから……」

ずつとうしろを走っていたらしいハゼが、肩で息をしている。やつとうしろを見て、ハゼしかいないことに胸をなで下ろす。

息を吐き出した。思い出したように、汗がどつとあふれてくる。

「壁まで来ちゃったね……」

ぜえぜえと息をしながら、切れ切れにそういわれ、初めて悪いと思っただ。

「ごめん、オレ……なんか、わけわかんなくなってる」

急に恥ずかしくなった。でも、ハゼは笑った。

「ソラはなんでも平気なのかと思ってたよ！ だいじょうぶ、それほどルートからはずれてないから」

「ごめん」

もう一度あやまる。ばつが悪いので目をそらして、壁を見た。

ニンゲンとピースルの住むところを区切る壁があるって話は聞いてた。聞いてたけど……

ものすごい違和感だ。

城の壁みたいに、石が積み上げられてるのを想像してたのに。

「これが……その、壁？ この向こうに、ニンゲンが住んでるって……」

「そうだよ。大きいでしょう」

大きいなんてもんじゃなかった。

上を見ても、右を見ても左を見ても、終わりが見えない。しかもこれ、材質はなんなんだろう？ コンクリート……ではないみたいだけど、石でもないみたいだ。金属っていわれちゃえば、そうかも思ってしまう。ツルツルした、白い壁。

「この壁……作ったのは、ニンゲン？」

ピースルの生活からすると、こんなものが作れるとは思えない。

「っていわれてるよ。この壁が、ぼくたちの国をぐるっと囲んでるんだ」

「囲んでる？」

なんだか、変な気分になった。囲んでるってことは、もう、壁で

区切られてるっていうより、ビースルの住むところが箱のなかに入るごと入ってるみたいだ。そう思えるぐらいに、どこまでも続く高い壁だった。

それにしても……これは、どういうことだろう。

オレは、こっちの世界のニンゲンっていうのは、それこそゲームの世界のひとたちみたいだ、のどかな生活をしてるって勝手に思ってた。住むところはちがっても、ハゼやティーアたちと、それほどちがわない暮らしをしてると思ってたんだ。

でも、この壁。

これって、よくわかんないけど、よっぽどの技術がなくなっちゃできないんじゃないか？

オレがだまって考えていると、ハゼが心配そうに顔をのぞきこんできた。

「だいじょうぶだよ、ぼくのルート内でペルティスに会うことなんて、そうないから」

まだ怖がってると思ったらしい。ちがうとはいわず、気になったことを聞いてみることにする。

「あの、モンスター……ペるていす？　って、結局、なんなんだ？　昔からいるの？」

単純にフシギだったから聞いたのに、ハゼの顔が急に強ばった。

「え、なんかまずいこと聞いた？」

「いや……うん、いつか、話しても。ペルティスはね、ニンゲンのなれの果てなんだ。ニンゲンとビースルが仲悪くなつた原因さ」

……？

いってる意味がわからなくて、ハゼの言葉を頭のなかでくりかえした。

なれのはて？

「あれ、もとはニンゲンってこと？」

ハゼがうなずく。

「うそだろ……」

ぞっとした。

いくら別の世界の話でも、あの気持ち悪いのがもともとはニンゲンだったなんて。

どうやったら、そんなことになるんだ？

なんだか考えることが多すぎて、オレは頭を抱える。そのまま、壁にもたれた。

もたれようと、した。

「？」

一瞬だけ、背中にひやりとした感触。それから、ピッと、小さな電子音。

うしろに壁があるはずなのに、まるで自動ドアのように、オレのところだけが開いた。支えるところを失って、あたりまえだけそのままうしろによるめく。

ドスン、としりもち。

顔を上げると、目の前に、白い壁。

「……え？」

なにが起こったのかわからなかった。ハゼの名を呼んでも、返事はない。

ズボンの下が、ひんやりとする。地面についたはずの手の感触も、土の上とはちがう。

「……まじかよ……」

絶望的な気持ちになった。

オレだけ、壁の向こう側に、来てしまったんだ。

## ワルモノ

【ワルモノ】 担当 桜

お城で暮らし始めて、一週間。

お城の暮らしって、すごく優雅なのを想像してたけど、現実はずんぜんそんなことなかった。

そりゃ、わたしは内緒でここにいるんだから、しょうがないけど。だれも来ないときはいいんだけど、だれかが来たらずっとベッドの下に隠れてなくちゃいけないくて、これがけっこう大変。

しかも、なんだかんだで、ちょこちょこ人が来る。プティのお世話をするメイドさんみたいな人とか、お掃除をしにくる人とか。あと、おどろいたのは、病気の人が部屋までやってくるってこと。

最初にお城に来た日に廊下ですれちがった二人のおじさん、あの人は身分の高い神官様みたい。その二人と、ほかにも同じような白くて長い服を着た人たちに連れられて、病を患っているって人がときどきやってくる。

そうするとまず、一番えらそうな、長いひげの神官様 シューケルト様って呼ばれてた が、長々とお話を始める。ラ・ディオスっていう、神様のお話みたい。それが終わったら、プティが病気の人の頭に触る。それだけ。

そうすることで、病気が治るんだって。プティは、自分にはそんな力はないって悲しそうにしてたけど。こっちの世界には、病院とか薬局とかはないみたい。ビースルの考え方の根っこが、「自然にゆだねる」ってことだから、手術とかなんとか、手を加えて治すなんてのは、考えられないことなんだって。まあでも、プティが触ってくれることで治っちゃうなら、それってすごいことだ。

あ、そうだ、気づいたことが一つ。

何人かのビースルを見てて、わかった。ネコみたいな耳がくっつ

いてるのはプティだけで、ほかはみんなウサギの耳みたい。ハゼとティアーが姉弟だからいっしょってことじゃなくて、ふつうは、ウサ耳ってことなんだと思う。きつと、王様の血を引いてるピースルだけ、特別なんだろうな。

「サクラ、そろそろ昼食です。気をつけておいてくださいね」

わたしがプティの部屋のを物色しながら楽しんでいると、その声をかけられた。そういえば、さっきお昼の鐘が聞こえてきた気がする。

ここでは、わたしたちの世界みたいにみんなが時計を持っているわけじゃなくて、城の係の人が時間を管理して、鐘を鳴らして教えてくれる。

「またベッドの下ー？」

しかたないってわかってるんだけど、ついつい不満が口をつく。

プティは困ったように笑った。

「もうしわけありません。ですが、だれかに見つかって大変なことになるよりは」

「うん、わかってる。ごめんね」

あやまってほしいわけじゃなかったから、こっちがごめんっていう気になっちゃう。

年下だと思ってたけど、プティも九歳、わたしと同じだった。病気だからか、見た目は華奢で幼く見える。でも、口を開けば、わたしよりもずっと大人びてる。

です、ます、で話すのやめてっていったんだけど、これしか知らないから難しいってことで、結局そのままだ。なんだか、変な感じ。わたしはおとなしく、ベッドの下にもぐりこんだ。

「今日のお昼ごはん、なにかなー」

ベッドの下からそういうと、上からプティの笑い声。なんて楽しそうに笑うんだろう。

ちなみに、わたしの食事は、ぜんぶティアーが持ってきてくれる。外で買ったっていうかんたんなものばかりだけど、けっこうおいしい

い。

とんとん、とノックが聞こえてきて、わたしは息をひそめた。  
「どうぞ」

プティが静かにいうと、戸が開く気配。いつものお姉さんが、失礼しますと声をかけて、しずしずとトレイを運んでくる。わたしからは足しか見えなくなつて、上でなにやら物音。テーブルをセツトしているんだろう。

ふしぎなもので、だめだめって思つてると、なんでだかせきとかくしゃみとかしたくなつちやつて、わたしは両手で口を押さえて必死にこらえてた。いつもこうだ。

おかげんはいかがですか、とか、今日はいい天気ですよ、とか、いつもとたいしてかわらない言葉をいくつか投げかけて、お姉さんが出て行った。しばらくそのままがまんして、プティから許可が出るのを待つ。

「サクラ、もうだいじょうぶ」  
「いいいにおい！」

わたしはベッド下から抜け出して、思わず思い切り空気を吸い込んだ。だって、ものすごくいいにおいがしてきてる。とってもおいしいにおい。

今日の昼食は、焼きたてパンと……野菜のスープかな？

「ティーア、まだかなあ。わたしのお昼はなんだろう」

カーテンの裏に隠してあったいすにすわり、ベッドに頬杖をついて食事をながめる。

おなか空いたなんて思つてなかったけど、見ていたら一気に空腹になつてきた。

「今日は遅いですね。なにかあつたのでしょうか」

「ティーアだつてお仕事があるんだもんね……隊長さんだっけ」

お仕事の合間をぬつて、わたしにごはんを運んでくれているんだ。文句はいえない。

「いいよ、プティ、食べてよ。冷めちゃうよ」

「こんなにじーつと見られてたら食べづらいだろつなと思いながらも、そういつてみる。プティは、もうしわけなさそうな顔をした。それでも、プティの手がスプーンを握る。わたしはそれを目で追った。」

「おいしそうだな……。食べたいな。一口ちょうだいっていったら怒るかな……。そんなことばかりが、頭のなかをぐるぐると回る。」

「実は、一度ちょうだいといって、強い調子で断られたことがある。だから、それからはおねだりなんてしなかったけど。」

「ね、ちよつとだけ、もらってもいい？」

「やっぱりがまんできなくて、聞いてみた。プティは、ふだんめつたに見せないような険しい顔をして、わたしはすぐにしまったと思っ。」

「これはダメです」

「びしり、と一言。」

「おもしろくない。」

「一口だけ。そのパン、ひとかけらだけ」

「食い下がる。だって、お姫様の食べるパンなんて、いまを逃したら食べる機会なんてぜつたいたい。」

「それに、ずいぶん仲良くなれたと思つてたのに、こつやつて断られるのはなんだかさみしかった。だからわたしは、ムキになつてた。」

「もーらい!!」

「軽い気持ちで、パンをつかんだ。そのまま、口に運ぼうとする。」

「サクラ!」

「ばしん、と手を叩かれた。」

「パンがベッドの上で一度跳ねて、床に転がる。」

「わたしは、なにが起こつたのか、理解するのに時間がかつた。すぐく大きな声だつた。」

「思い切り、手を叩かれた。」

「怒るといふよりも、ただただびっくりしてしまつ。いまのは、ほんとうに、プティがやつたの？」

「死にたいのですかっ?」

プティは震えていた。ものすごく怒っているように見える。けど、やっぱりわたしには、よくわからない。死にたい? お姫様の食事を横取りしたから、殺されるってこと?

わたしが目と口を大きく開いたまま、わけがわからずにぽかんとしていると、プティが大きく息を吐き出した。

首を左右に振って、頭を抱えるように額に手をやる。

「……ごめんなさい。どうかしてしまいました。ただ、お願いです、わたくしの食事を食べたがるようなことは、やめてください」

冷静にふるまおうとしてるけど、やっぱり声が震えてる。

泣いているのかと思って、顔をのぞきこんだ。長い髪に隠れた顔は、とてもつらそうだ。

「ごめん……そんなに、いけないことだとは思わなくて」

あやまつたら、わたしが泣きそうになってきた。

きっと、すごく悪いことをしてしまったんだ。

「ごめん」

二回目のごめんが、涙声になる。プティがあわてて顔を上げた。

「ちがうんです! ただ、わたくしの食事は、危険なのです。もしも毒物が入っていたら、大変なことになってしまいます。わたくしには、サクラを無事に帰す義務がありますのに」

……どくぶつ?

ますます、わけがわからなくなつた。

死にたいのですかっ?、そういうこと?

「ど、毒が入ってるの?」

プティは、両手で口を押さえた。しまったいっちゃった、って感じだ。

「いえ、あの……そういう可能性も否定できないということですよ」

「どういうこと? プティ、だれかに命を狙われてるの? え、でもプティは、ふつうに食べてたよね?」

もう、頭のなかははてなマークだらけだ。

そうだ、プティはパンだつてスープだつて食べてた。なら、毒なんて入ってないってことになる。

「ええ、わたくしは……だいじょうぶなんですけど」  
「なんで？」

体質のちがいが、そういうの？

わたしはもう、ちゃんと説明してくれるまで、引き下がるつもりなんてなかった。そのままじつとプティを見る。

プティは、わたしから目をそらしてたけど、しばらくして、あきらめたように話し始めた。

「わたくしの両親は　つまり、前王と王妃ですが　二年前に、亡くなっております」

「……ん？」

話が飛んだ。なんでそうなるの？

「ご両親がもう亡くなつてゐるっていうのは聞いてたから、わたしは別におどろかない。おどろいたのは、この話題の飛びかただ。」

「こんなこと、憶測でいってはいけないというのは、重々承知しております。サクラだからいのです。世間知らずの娘の世迷いごとと思つていただいてかまいません」

難しい言葉で前置きが入る。わたしは辛抱強く、続きを待つ。

「……わたくしは、父様と母様は、殺されたのではないかと、思つています」

「ええ？」

すつとんきような声をあげてしまった。

「こ、殺され　って、だれに？　え、でも病気だつたつて……」

「お元気でした。急なご病気で、お亡くなりになりました。お二人ともが、です」

ぴんときた。

つまり……

「……毒物、で？」

いつかテレビで見た歴史物で、大統領暗殺とか、もっと昔に偉い

人が殺されたとか、そういうのをやっていた気がする。

こつちの世界でも、同じなんだ。

「なんの証拠もありません。憶測です。そして……これこそ憶測ですが、そのころから、わたくしの体調も急に悪化しました。食事のあとが、特につらいのです」

「！　じゃあ、なんで食べてるの？」

プティは、瞳を伏せた。

「憶測だからです」

「はあ？」

もう、おどろきすぎておかしくなりそうだ。

「それでも、おかしいと思うなら、食べなければいいのに！」

「こんなこと、だれにいえませうか？　自分でも理解しているのです。わたくしは、父様と母様を失ったショックで精神を病み、このような妄想にとりつかれてしまっているのだと」

プティはすごく冷静だった。自分のことなのに、ひとごとみたいに、淡々とそういった。

そりゃ、もちろん、気のせいかもしれない。気のせいのほうがいい。

けど、毒が入ってるかもって思ってるのに、なんで食べていられるの？

「そうだ、プティのパパとママのことだって……元気だったのに、急に病気で死んじゃったんでしょ？　プティが変だって思うぐらいなら、ほかにもおかしいと思った人、いたんじゃないの？　ティーアとか、ハゼだって」

わたしは、あたりまえにそう思った。けどプティは、とてもさみしそうな顔をした。

「ご存じでしょう。いまのわたくしのように、以前は父様と母様が、病人に触れて病を取り除いておりました。あるとき、神官がラ・デイス様のお声を聞いたのです。あまりに多くの病を取り除いたために、数多の病人たちの身代わりとなり、父様と母様の身が病におか

されると。そしてそれは、決して治ることはない」と

「なんだかむずかしいことをいった。わたしは、一生懸命その意味を考えた。」

「ラ・ディオス様っていうのは、こっちの世界の神様のことだ。神様が、プティのパパとママが死んじゃうっていうって、その声を神官さんが聞いた。」

「……でも、ということとは……」

「プティはそれ、ぜんぜん、信じてないんでしょ？　ほかのみんなは信じたの？」

「だれも、ラ・ディオス様のお声をうたがうことはありません。それは、ここでは大変な罪になります」

「そうか……そりゃ、そのラ・ディオス様っていう神様と、プティたち王族を信じてるからこそ、病気になるったら治してもらいにくるんだもんね。」

「けど、プティは信じてないんだ」

「プティは、あいまいに首を動かした。」

「もちろん、ラ・ディオス様のお声は、信じるべきだと思っております。けれど、病については……逆にいえば、それをうたがうことができるのは、わたくしたち王族だけなんです。わたくしは、自分に病を取り除く力などないのだからと思っております。それは、父様や母様も、同じでした」

「……ええ？」

「なんだかおかしな話になってきた。」

「自分にそんな力はないっていつてたのは、謙遜とかじゃなくて、ほんとうにないってこと？」

「ちよつと待って、待って」

「考える時間が欲しくて、両手を開いて待ったのポーズをする。」

「つまり、どういうこと？」

「……ええと……こっちの世界では、病気になったら、基本的にはなにもしないで寝てるんだよね。けど、それだけじゃ治らないよう

なときに、高いお金を払って治してもらいにお城にくる。プティは、病気を治すために、病氣の人に触る。わたしも見てたけど、触ってもらった人は、すごく感謝して帰ってく……けど、それじゃ、病氣は治んないってこと？」

「治らないのだろうと思っていません。事実、亡くなったかたたちもたくさんいらっしやいます」

「じゃあ、なんでみんな来るの？」

プティは答えなかった。でも、その悲しそうな顔を見て、わかった。

みんなが信じてるからだ。プティや、プティのパパやママにそういう力があるって、信じてるから。

きつと、うたがうなんてことしないだろう。もしもうたがったりしたら、罪になるってことだ。

「変！」

わたしの感想は、その一言に尽きた。

変。ぜったい変。おかしい。

まるごと信じてうたがわない人たちもおかしいし、力はないって思いながら、それを続けるプティも変。神官さんたちもみんな変。ついでに、そのラ・ディオス様っていうのも変。

そこまで考えて、あ、と思いあたった。

そうだ、病を治す力がないから、プティのパパとママがそんな理由で死ぬわけがないって話なんだ。

ってことは、ラ・ディオス様がうそをいった？

ううん、ラ・ディオス様っていうのは、実際にいるひとじゃないんだから、その声を聞いたっていう神官がうそをついてる？

そうだ、きつと、そういうことだ。

「その神官に殺されたんだ……」

口に出すと、よほどおそろしいことに感じられた。でも、わたしのこの考えが、まちがってるなんて思えなかった。

だって、プティはいま身体が弱っていてお仕事ができないから、

王様としてのお仕事は神官が代わりにやってるんだっていった。あの、長いひげのいちばんえらい神官 たしか、名前はシューケルト。

「そうだ、きつと、あいつだ。」

王様と王妃様を殺して、この国でいちばんの権力者になって……さらに、プティの食事に毒を入れて、プティを病気にしとく。そうすれば、ずっとシューケルトがトップにいられて、やりたい放題だ。「憶測です」

わたしの考えていることがわかったのか、プティがぴしりといった。たしかに、こんなことをいいたして、もしちがってたら大変なことになっちゃう。それは、わかるけど。

でも、なんだか、納得いかない。  
変なことばかりだ。

「とにかく、憶測でもなんでも、ここに運ばれてくるごはん、食べちゃだめだよ。ティーアならきつとわかってくれるから、ぜんぶ話して、プティのぶんも買ってきてもらおうよ。ここのは、こっそり捨てて、食べたことにして」

「できません。……いったでしょう、これはわたくしの、妄想です  
なんだか、いらいらしてきた。

どうしてそうなっちゃうんだろう。わたしでもおかしいってわかるのに、プティにわからないはずがないのに、どうしてそのままにしていられるんだろう？

「こわいってこと？」

ちよつとトゲのあるいいかたになった。プティは、答えない。

「自分で動くのが、こわいってこと？ ぜんぶを自然にゆだねるって、いいことみたいに聞こえるけど、プティのは、まるでぜんぶあきらめちゃってるみたい。おかしってわかってるのになんにも変えないなんて、そんなの、かつこよくもなんともないよ」

いい始めたら、止まらなくなった。プティはわたしから目をそらす。

「サクラにはわかりません」

かっとなつた。そりゃ、お姫様の苦勞なんてわかんないけど

「わたし、わかんないし、わかんなくていい。プティを信じたまま死んじゃった人たち、きつとたくさんいるんでしょ？ プティがあきらめないで動いてれば、なんとかできたかもしれないのに。それって、だましてるってことじゃん！ ごはんだって、毒が入れられてるかもとかいいながら食べ続けているのって、それって結局、いいわけにして逃げてるだけなんだ。妄想とかいうのだって、そうやって自分をごまかしてるだけで」

いいすぎだつていう自覚があつたけど、でも止まらない。

「そういうの、いくじなしていうんだよ。そうやってずっとベッドに寝てるだけで、ぜんぶ知ってるのになんにもしない。自分なんて死んでもいいって思ってる？ いまだって、死んでるとほとんど変わらないじゃん！」

さすがに、あつと思つたけど、もう口からぜんぶ出てしまつていた。

プティが、だまつてこつちを見てる。こわいくらいに無表情だ。

でも、ごめんって言葉が出てこない。だんだん、わたしはおかしなことなんてひとつもいつてないっていう気になつてくる。いいかたはきつかったけど、でもまちがってない。

だって、おかしい。おかしいっていうのは、ぜつたい、本当だ。

「……そうかもしれません」

ぼつりと、プティがつぶやいた。そのまま、それ以上食事には手をつけないで、ベッドに横たわつてしまう。

わたしは、自分から話しかける気にはならなくて、だまつたまま、部屋のすみっこに移動した。

それから、どれぐらいの時間が経つただろう。

鐘の音が、何度か聞こえてきた気がする。わたしの感覚では、午後二時とか三時つてとこかな。プティは、眠ってしまったみたいだ。

わたしは、いろんなことを考えてた。

思えば、こつちに来てから、じっくりなにかを考える時間なんてなかった。いつも近くにだれかがいたから。お城での時間だって、プティとおしゃべりはぜんぜん尽きなくて、話しているうちに時間は過ぎていった。

ママは、心配してるかな。

パパだって、仕事から帰ってきたらわたしたちがいなくて、どう思っただろう。夜遅くに帰ってきて、わたしたちが寝ている部屋をいつものぞいてるの、知ってる。まぶしくて、ときどき目が覚めちゃうからいやだったけど、いまはぜんぜんいやなんて思わない。

警察とか呼んで、誘拐だって大騒ぎかな。

ママ泣き虫だから、泣いてるかな。

……なんだか、泣きそうになってきた。考えないようにしてたのに、こんなに静かだと、どうしても考えちゃう。

きつと、帰れる。だいじょうぶ、だいじょうぶ

わたしは、急いで首を振った。考えてもしようがないことは、考えちゃだめだ。

そうだ、ちがうことを考えよう。

わたしはカバンからノートとペンを引っ張り出した。プティが話してくれたこと、わたしがそうにちがいないと思っただけのことを、できるだけいいいに、書き出していく。

書き終わって、考えた。

そもそも、わたしたちはどうしてこの世界に来たんだろう。

偶然？

このまま、なにもしないで帰るのかな。マンガやゲームの主人公たちみたいに、なんか大きなことをしたいってわけじゃないけど……それでも、プティの話の聞きちゃったのに、それを知ってるのはプティとわたしだけなのに、なにもしないままで？

「……なにか、できることがあるかもしれない」

気づいたら、声に出してつぶやいてた。

プティが寝てるのを確認して、お城に来たときみたいに大きな布を頭からかぶって、てるてる坊主になる。使えそうな物をポケットに入れて、そっと部屋を出た。

赤いじゅうたんの、長い廊下。外の光は入ってこなくて、壁に点々としてるろうそくだけじゃ、ちよつと薄暗い。でもその薄暗さが、いまはありがたかった。

きつと、夕食の準備をしているころだ。プティの料理になにかを混ぜてるって証拠があれば、プティだって考えを変えるはず。もちろん、毒なんて入れてないかもしれないけど……でも、それならそれで、安全だって確認ができるなら、結果オーライだ。

キツチンは、一階かな。わかんないけど、学校の給食室だった一階だから、きつとそう。来るときにはずいぶん階段を登ったはずだから、まずは階段を探さなきゃ。

お姫様の部屋があるような階には、なかなかだれも来ないのか、人影はぜんぜんなかった。最初に来たときも、すれ違ったのはあの神官たちだけだから、そういうものなのかもしれない。

しばらく歩いて、やっと階段を見つける。でも、階段を見下ろして、ためらった。

「……せまい……」

しかも、隠れるところがない。もしだれかとすれ違ったら……こんなこともが一人でうろろしてたら、ぜつたいに呼び止められる。でも、プティは、ときどき町のこどもをこっさり呼んでるっていつた。神官たちも知ってるふうだったし……そうやっていえば、だいじょうぶかな。

わたしは息を飲んで、急いで階段を下りた。でも、すぐに階段が途切れてしまう。もっと長かったと思ったけど、ちがう階段を下りちゃったのかな。

もう戻ろっかな、と思った。迷子にでもなったら、どうしようもない。

「あー！」

廊下の向こうに人影が見えて、あわてて階段の影に隠れる。白い、だぼだぼの服を着てた。たぶん、神官だ。

部屋から出たところみたいだった。おそろおそろ、顔を出してみ

る。白いうしろ姿が、遠ざかっていく。よかった、こっちに来るんじゃない。やなくて。

戻ろうか、それとも進もうか　ちよっと考えたけど、ここまで来たんだから、手ぶらでは帰れないっていう思いが勝った。わたしのなかではもう、神官はみんな「ワルモノ」だ。あとをつけたら、なにかわかるかもしれない。

意を決して、廊下に出る。でも、すぐに後悔した。

「おや、迷子かな？」

うしろから、少ししゃがれた、低い声。聞き覚えがある。

わたしは完全に固まってしまった。ふり返る勇氣もない。

「姫様のところへ来たのでしょうか。一部には暗黙の了解があるとはいえ、良く思わないものも多い。すぐに戻りなさい」

優しい、おだやかな声だった。でも、わたしはこの声を知ってる。

長い長いお話を、何度も聞いた。

顔だつてすぐに思い出せる。長いあごひげの、ちよっとこわそうなおじさん。

いちばん偉い神官だ。名前は、シューケルト。

いきなり大正解なのか、それともいちばんの悪いクジを引いてしまったのか、よくわからなくて混乱する。だって、わたしの考えでは、この人がプティのパパとママを殺した張本人なのに。

「……場所がわからないのですか？」

動かないわたしをおかしいと思ったのか、さっきとはちがう声で聞いてくる。ふり返るべきなんだろうけど、こわくてできない。このままじゃ、怪しまれちゃう。

「だ、だいじょうぶです」

なんとか、声だけ出した。もう、本当に毒を盛ってるかつきとめ

るとか、そんなのはどこかに行ってしまった。

とりあえず、この場から離れなきゃ。

わたしは、顔を見られないように 考えてみれば、顔を見られ  
たってどうってことはないんだけど うつむいて、さつと階段に  
向き直る。そのまま登ろうとして、とんでもないことに、段につま  
ずいてしまった。

「わわっ」

よるめく。とっさに、フードを押さえる。

わたしの腕を、シューケルトがつかんだ。ささえてくれたんだけ  
ど、その冷たさにぞくりとする。

「部屋まで案内しましょう。どうも、あぶなっかしい」

これが、わたしが疑っている人でなければ、素直に嬉しい申し出  
だった。けど、もう完全にありがた迷惑というやつで、困惑してど  
んどん頭に血が上がっていく。

「だいじょうぶです！ほんとに、ひとりで戻れます！」

フードを押さえて、下を向いて早口でいう。こんなの、フードの  
下に見られたくないものがあるっていつてるようなものだ。

でも、考えと行動が一致しない。

わたしは、シューケルトの手をふりほどくようにして、階段を駆  
け上った。もう、逃げるが勝ちってやつだ。

「待ちなさい」

強い調子で、呼び止められた。

最初に、校長先生みただって思ったけど、ぜんぜんちがう。だ  
って、校長先生はもっと優しい。シューケルトの一言で、ほんとう  
に、動けなくなる。

ゆっくりと、階段を登ってくる気配。あの長い服をひきずる音。  
頭のなかが真っ白になった。

もう、だめだ !

「好意は受けるものです。ラ・ディオス様がお嘆きになりますよ。  
案内しましょう」

そういつて、シューケルトがわたしを追い越す。いいかたは優しいけど、逆らうことなんて許さないって調子だ。

そうか、お城のなかを勝手にうろつくようになってことなんだ。問題にでもなったら、困るのはわたしだけじゃないってことだ。

「……姫様にも困ったものだ」

小さな、ほんとうに小さなつぶやきだった。

自分の客を勝手に出歩かせて、って意味だったんだと思う。でも、わたしにはそれが、とても腹立たしいものに聞こえた。

わたしのなかの引き金を引くには、その一言でじゅうぶんだった。「どうしてですか」

敵意丸出しの声になった。さつきもそうだったけど、どうやらわたしは、一度スイッチが入ると止まらなくなっちゃうタイプみたい。こわいなんていうのはどっかにいっちゃって、立ち止まって、目の前の大きな背中を見据えた。

シューケルトがふり返る。

「……どうして、というのは？」

「プティがお城にこどもを呼ぶのは、さみしいからです。ズーッとベッドの上から動けないからです。それなのにどうして、あなたが、そんなことをいうんですか」

完全にけんか腰だ。それが伝わらないはずもなく、わたしを見下ろすシューケルトの目が険しくなる。

「どうして、わたしが、いつてはいけない？」

やめとけばいいのに、わたしは続けた。

「だってあなたが、プティに毒入りのごはんを食べさせてるのに！」  
しん、となった。

まるで廊下いっぱい、わたしの声が響いたみたいだった。

シューケルトの目が、一瞬強ばった。たしかに、動揺した。でもすぐに、ばかにしたような目になる。

「世迷いごとを」

受け流されるのかと思った。そういつて、鼻で笑ったから。

でも、次の瞬間には、わたしはシューケルトに腕をつかまれ、そのまま抱き上げられていた。

「きゃっ」

口もふさがれて、悲鳴が声にならない。抵抗もむなしく運ばれて、たくさんある部屋のうちのどこかに入る。

扉を閉めて、カギをかけ、それからわたしを放り出した。

部屋のなかを見る余裕はないけど、放られたのにおしりは痛くなかった。客室みたいだ。じゅうたんが敷かれている。

「世迷いごとであつても、そのようなことを吹聴されるのは、好ましくありませんね。嘆かわしい」

刺すような目で、シューケルトがわたしを見下ろす。

でもその様子に、わたしは確信していた。やっぱり、こいつがワルモノだ。

だって、正しいことをしているなら、動揺したりしない。こうやって、わたしを捕まえたりする理由がない。

わたしは、かえって気が大きくなっていった。もう、ここまできたら、いいたいことをぜんぶいってやる！

「プティのパパとママを、殺したでしょう。わたし、ぜんぶ知ってるんだから」

ふしぎと、声も落ち着いていた。シューケルトは、無表情のまま、少しだけ眉を動かす。

「最近のこともというのは、平気でそういう発想をするのですかな。毒を盛る、殺す、などと、恐ろしい」

「恐ろしいのはそっち」

わたしはシューケルトをにらんだ。いいたいことは、すらすらと口から出た。

「神様の声を聞いたなんてうそついて、ヒトゴロシして。プティに毒を盛って弱らせて、権力握ろうとしてる。それに、病気のひとたちもだましてお金ふんだくってる。ラ・ディオス様ってのが本当にいるなら、罰を受けるのはそっちなんだから！」

「おまえはだれだ」

急に、シユーケルトの声が低くなった。口調まで変わる。顔も、さっきまでの顔とぜんぜんちがう。すごく冷たい目。

わたしは答えない。でも負けたくなくて、目だけはぜったいそらすつもりはなかった。

顔をしっかりと見ようというのだろう、シユーケルトが、わたしのフードに手を伸ばす。わたしはもう、受けて立ってやるうって気になっていた。だから、フードがはずされても、身じろぎしなかった。「ばかな……ニンゲンだと……！」

シユーケルトが、目を見開く。やがて、さもおかしそうに笑い出した。

なにがおかしいの。こっちは、真剣なのに。

「なるほど、ニンゲンであるなら、呪われた思考にも納得がいく……！ だれも現実に見たことのないニンゲンなど、もうとうに滅びたかと思っていたが……そうか、すべてをいいあてたのがニンゲンというのは、おもしろいな。私は本当はビースルではなく、ニンゲンであったのかもしれない」

気持ち悪いぐらいの笑顔だった。目を細めたままで、膝を折る。

「ニンゲンのお嬢さん、あなたならおわかりでしょう。私の向上心は、あなたがたに近いものだ」

わたしは、こっそりと、ポケットを探った。だいじょうぶ 落ちて着いてやれば、まちがえない。

「認めるんだ、あなたがやったってこと」

そつと問う。にたりと、シユーケルトは笑った。

「当然だ。愚かな前王と王妃を殺し、姫に毒を盛るという偉業、私以外に、だれが為せるだろう」

偉業、つていった。

わたしには、それが許せなかった。

こんなやつが、人間に近いだなんて、どうかしてる。

「それで、貴様はどうする？ そのことを、触れ回るのか？ そんな

なことをしても、気が触れたこともだと、哀れみを受けるだけだが」  
そうだ、この先を、考えてなかった。  
どうしよう。ひょっとして、口封じとかされるのかな。それだけはいやだ。

わたしは、頭をフル回転させて、どうすべきかを考えた。マンガやゲームの主人公は、こういうとき、どうするんだっけ？ だれかが助けに来る？ それじゃだめだ、なんとか機転を利かせて、この場を切り抜けないと。

でも、わたしの不安そうな顔が、まるごと向こうに伝わってみたいだった。シューケルトはおかしそうに肩を震わせる。

「この国では、ひとの死すら、ラ・ディオス様のお導きだ。終わりのときまで、そうして考えているといい、勇敢なお嬢さん」

「……！」

くやしいことに、わたしはなににもいい返せなかった。

## 壁の向こう

【壁の向こう】 担当 空

オレは、桜がムチャをして、変なおっさんにつかまるところを見ていた。気が気じゃなくてあれこれ叫んだけど、もちろん声は届かなくて、どうにかしなきゃと全力で走った。

どうして、どうやって見てたかっていうと　それはちょっと、説明に時間がかかる。

壁の向こう側に来てしまったオレは、もう、ただただおどろいた。もとの場所に戻らきゃってことは、思いつかなかった。そんなことふつとぶぐらいの、衝撃だったから。

壁の向こうは、ハゼたちの暮らしてる場所とは、ぜんぜんちがってた。

外ですらなかった。

なんていうのがいちばんわかりやすいだろう　そう、ハゼたちがいるところが「ファンタジー」なら、こっちは「SF」って感じだ。

オレらの世界ですら見たことのないような、例えば宇宙モノのアニメで見えるような世界が、広がってた。

床も、壁も、天井も、ぜんぶが銀色でぴかぴかしてる。照明のたぐいは見当たらないのに、すげえ明るい。ムダなモノは一切ないって感じの、いやにすっきりとした空間。

まっすぐに、道が延びてた。両側には、扉みたいなのが等間隔に並んでて、そういう意味じゃプティのいる城に似てる。扉を開けてみる勇氣はなかったから　というかドアノブが見当たらないオレはひたすらまっすぐ歩いた。

ずっと同じ景色だから、どれぐらい歩いたのかわからない。そのうちに、だだっぴろい空間に出た。ちよつと学校の体育館にフンイキが似てるかも。ただ、その真ん中に、でかい柱みたいなのがひとつ。

行き止まりかと思って見わたすと、オレが出てきたような道が、あちこちに伸びてる。ずいぶん広いみたいだ。

「……なんだこれ」

オレは、柱を見上げた。柱っていつても、天井まであるわけじゃない。ツルツとした、銀色の塔。

おそろおそろ、手を伸ばしてみた。ピツと電子音が聞こえて、あわてて手を引っ込める。

「ごちゃごちゃっ」と音が聞こえた。よくわかんなかったけどたぶん、なにかをいわれた。

そのまま、反応ナシ。もう一度、触ってみる。

今度は電子音は聞こえなかったけど、やっぱりなにか声がする。

外国語っぽい。

「わっかんねーよ」

思わずつぶやくと、ピツとまたあの音がした。

『承認シマシタ』

急に、声が日本語になった。機械的な声だ。うたがいようもなく、柱から聞こえた。

「……しゃべった……」

おどろいたけど、でも触ってしゃべる機械っていうのは、オレらの世界じゃ珍しくもない気がする。ただ、オレの日本語に反応して日本語に直ったってのはすごいけど。

……日本語？

待てよ、ここって異世界ってやつだろ。日本語があるってことは、日本があるのか？

それとも、似てるけどちがう世界、とか？

『区域ヲ指定シテクダサイ』

区域つてなに。指定しろっていわれても。

「えっと……もとの世界に戻りたいんだけど」  
ダメもとでいって見た。しばらくの沈黙。

『区域ヲ指定シテクダサイ』  
流された。

わからん。パソコンみたいに、ヘルプ機能とかないのか？

「わからない！ 困った！ えーと……教えて！ 使い方を教えてください、ヘルプ！」

いろいろいって見た。すると、ピツとまたあの音。なにかに反応したらしい。

フォン、とそれこそパソコンの電源を入れたときみたいな音が出て、目の前に画面が現れた。画面っていうか、映像が映し出されたような感じだ。なにもないところに、文字が一気に表示される。

学校にある、ビデオを白い布に映すやつ、あれを布じゃなくて黒板にそのままあてちゃったときみたいな、そういう感覚だ。ただ、それよりもずっと見やすい。

思わずうしろを見ただけ、映写機みたいなものがあるわけでもない。やっぱり、SFだ。すげえ。

「……なんかいっぱい書いてある」  
文字を読もうとした。日本語だ。読めないわけではなさそうだけど……

「フリガナ！ フリガナよろしく」  
いってみると、ちゃんと漢字にフリガナがつく。いいな、こんな欲しいな。

どうやら、いくつかの項目があるみたいだけど、それぞれに長々と説明がついてて、正直読む気がしない。目を細めてまじまじと見ていると、上の方で、チカチカと点滅している文字があることに気づいた。

『新しい記録があります』って書いてある。その横には数字が並んで、日付だろうと思うけどいつなのかはわからない。

「じゃあ、新しい記録を読む」  
すると、画面が切り替わった。

『ここを訪れた者へ』  
そんな一文で始まっていた。

『ここを訪れた者へ』

ここにいるということは、おそらくあなたは人間なのだろう。  
もしもあなたがビースルであり、そしてビースルの地を愛しているのならば、この先を読んではいけない。

私は、別の世界より呼び寄せられた、別の世界の人間だ。過去にも類例があったというから、未来にもあるのだろうと信じ、この記録を残す。

私は、ビースルを、ビースルの暮らしを、愛している。この穏やかな暮らしを波立たせるべきではないと考える。

しかし、偶然に、壁の向こうへ来てしまった。そして、知ってしまった。私はこのことを、ビースルの良き友人たちに伝える気はない。しかし、記録として、ここに残しておく。

このことを伝えるか伝えないかは、いまこれを見ているあなたに託そうと思う。というのも、私ひとりの胸にしまっておくには、あまりにも大きな事実だからだ。』

オレは、すべてを読み終えた。

長い長い文章だったけど、休憩もなしで、一気に読んだ。

安心して、その場にすわりこんだ。

ずいぶん長い間、そうしていた気がする。ふと、桜はいまどうしてるだろうと考えた。

とにかく、もう、帰ってしまいたかった。

このままこつちの世界にいても、それまでのように、無邪気に楽しめる気はしない。

「……帰ろう」

とりあえず、ハゼたちのところへ帰ろう。それから、桜を迎えに行こう。

立ち上がり、顔を上げると、あんまりほっといたからか、いつのまにか最初の画面に戻っていた。たくさんの項目のなかの、『観察する』という文字が目にとまる。

そうだ、きつと、ここから見る事ができるんだ。

そもそも、そのために、これはあるんだから。

「観察する」

心は変に静かだった。もう、緊張はない。

オレの声に反応して、画面がすぐに切り替わった。壁と、その内側の森に囲まれた、丸い景色が映し出される。城はすぐに見つけることができた。中央にある、大きな建物。

ビデオで撮影するときみたいに、城にズームしていく。ぐんぐん城が大きくなって、壁を通り越して内部を映す。

まず、プティの部屋を見た。プティが寝ているだけで、桜の姿が見えない。

妙な胸騒ぎがした。画面の切り替えをくり返して、桜を探す。

プティの部屋からそう遠くないところで、見つけた。けど、やばいことになってた。

えらそうなおっさんに、桜が食ってかかって

それからオレは、全速力で来た道に戻って、あの高い白い壁をためらわずに触った。思ったとおり、来た時みたいに急に開いて、わかってたはずなのに勢い余って、向こう側につんのめる。

バランスをくずして、よろめいたまま壁を越える。ふり返ったら、どこが開いたのかわからないくらい、いまここを通ってきたっての

が信じられないぐらいに、あたりまえに壁がもどおりになってた。オレが特別だなんて思えない。人間が触れば、開くようにできてるんだ、きっと。

森のなかだから空はほとんど見えないけど、なんだか薄暗かった。けっこう長い時間、向こう側にいたみたいだ。

「ソラ！ だいじょうぶかつ？」

道じゃないところから急に声がして、オレはびっくりとした。出てきたのがティーアだとわかり、胸をなでおろす。どうやら、ずいぶん敏感になってるみたいだ。それどころじゃないってのに。

「ソラ！」

ティーアのうしろからハゼも出てきて、オレに飛びついてきた。もう、ほとんど泣きそうな顔だ。っつーか、目が赤いから、たぶん泣いたんだ。

「よ、良かったよ……！ もしかしたら、サクラを置いて先に帰ってしまったのかと……急に、消えたから……」

涙声になってる。そんなに心配かけてたのか……一度戻って、それから探検したほうが良かったかもしれない。悪いことしたな。

「ごめん」

とりあえずあやまった。いくら相手が男でも、泣かれたらあやまるしかない。

「まさか、壁の向こうに行っていたのか」

ティーアが、固い声で聞いてくる。身体のうちこちに葉っぱなんかがついてて、必死に探してくれてたつてことがわかる。ハゼが連れてきたんだらう。

「うん、オレにもよくわかんないけど、壁に触ったらすり抜けたみたいになって……気づいたら、向こう側に行ってた」

「ニンゲンに、会ったのか」

オレは、正直、返答に困った。けどティーアがこわい顔をしていたので、首を振る。

「会ってないよ」

ティーアがほつとしたように見えた。ハゼのほうは、むしろ残念そうに見える。

いや、そんな話してる場合じゃないんだっ!

「それどころじゃないんだ、サクラが変なおっさんに捕まった。いそいで城に行かないと」

「サクラが?」

二人がそろって、きよとんとする。

「サクラも、向こう側にいたの?」

ああ、そうか! そうなるのか!

どうやって説明したもんかな……くそ、こんなところで時間食ってる場合じゃないのに。

「ティーア、頼む! オレを城に連れてってくれ。くわしいことはいえないけど……とにかく早く行かないとやばいんだ。お願いだ!」

ティーアは、じつとオレを見た。心の奥までのぞかれてるような目だ。そらしちゃいけない。オレは、まばたきもしないで、見返す。

「……わかった」

「ありがとう!」

オレはティーアの手を両手で握りしめた。あれだけニンゲンを毛嫌いしているティーアが、オレを信じてくれてるっていうのが、たまらなく嬉しかった。

「サクラが大変なんでしょう? ぼくも行くよ」

ハゼもそういつてくれた。なんだか、胸の奥がじんとした。

そうだ、ニンゲンとかビースルとか、関係ない。こうやって、だれかを信じて、信じられてってこと、向こうの世界にいたときにはなかったような気がする。なにかに必死になることも。

二人は、オレを捜すために、ここまで馬で来ていた。オレはティーアのうしろに乗っかって、ぐつと身体をひつつけてしがみつく。こわいとかいってられない。

「とばすぞ!」

馬が走り出す。目を閉じて、ひたすら手に力を込めた。そうして

いないと、振り落とされそうだった。

\*

城の裏口から入って、こっそり静かにとかいってられなくて、オレは先頭をきつて全力で走った。来たときと、戻るときにも通つてから、迷うことはない。

フードを押さえながら階段を駆け上り、プティの部屋の戸を思い切り開ける。開けてから、なかに世話係でもいたらやばいなんて思ったけど、いらぬ心配だった。

プティが、ベッドの上でぼんやりとしていた。もともと顔色は良くないけど、それにしても真っ青だ。

「プティ！ 桜は、どうした？」

あせりから、怒鳴りつけるような声になる。プティが驚いてこつちを見た。遅れて部屋に入ってきたティーアが、オレを追い越してプティに駆け寄る。プティは、はらはらと泣き出していた。

ハゼが、オレの背中にそっと触れた。落ち着いて、と声をかけられ、ちよつとだけ我に返る。

べつに、プティを責めたいわけじゃない。どうせあいつのことだ、オトナぶるわりには考えなしだから、ひとりで勝手に突っ走ったんだろう。

「い、いくら呼んでも、いないのです……わたし、わたくし、サクラを怒らせました……！ わたくしが、あんな話をしたから、出て行つてしまったのです……！」

しゃくりあげながら、どうにかこうにか声になつたって感じた。要するにケンカしたってことか。女はくだらないことでケンカするもんな。クラスの子もそつだ。

「どんな話をしたんだ？ あいつ、白い服来た偉そうなおっさんにつかまつたんだ。心当たりあるか？」

オレの言葉に、プティは目を見開いた。そこから一気に涙があふ

れ出して、なにかをいおうとしてるけど声にならない。

心当たりがあるって顔だ。そこだけ説明してくれりゃ、それでいいのに！

「白い服……というのは、まさか神官服か？ めったなことをいうものではない。そのようなことはありえない」

プティの背中をさするようにながら、ティーアが不機嫌そうにいつてくる。神官服？ それを聞いて、ピンときた。

見たことあると思ったんだ、あの顔。最初に城に来たときにすれ違った、あごひげ！

「そうだよ、あのえらそうなおっさんだよ！ どこにいるんだよ！」  
オレだって説明しなきゃ伝わらないのに、感情ばかりが先走ってしまう。こんなこといったって、わかるわけないってのに。

「ソラ、これ」

ひとりだけ冷静な声で、ハゼがオレを呼んだ。オレはいらいらしながら、そつちを向く。

ハゼは、ノートを手にしていた。ピンクの水玉の、趣味の悪いヤツ。

「！ 貸して！」

奪い取るように受け取り、ページをめくる。算数の式が途切れた次のページに、丸っこい字でなにやら書かれてる。

読み終わって、頭がくらくらした。

あいつ、こんな危なっかしいことに首突っ込みやがって！

「シューケルトってヤツんここに、案内してくれ。サクラはそいつに捕まったんだ」

文字を読んだことで、いくらか落ち着いた。いいながら、息を吐き出す。

ティーアとハゼが、コワイ顔でこつちを見た。プティは、ただ泣きじゃくってるだけだ。

「シューケルト様って……最高位の神官様だよ？」

「ニンゲンだということが、ばれてしまったか……あれほど注意し

るといったのに」

話が伝わらない。ああもう、イライラする！

「ちがうのです」

涙をぬぐいながら、震える声で、プティがいった。

「わたくしが、いけないのです。サクラはなにも、悪くない……」

「あんたさあ！」

八つ当たりのような気もしたけど、止められなくて、オレはプティをにらんだ。

「なにもできませんって顔してるけど、あんた一応お姫様だろ？」

そうやってずっと泣いてるつもりかよ。突っ走った桜はバカだけど、あんたよりずっとマシだ。あんた結局、いいなりのお人形さんだもんな」

「ソラ！」

ティーアが手を上げて、オレは身をすくめる。

「やめなさい、ティーア！」

鋭い声が、それを止めた。見た目からは想像できないぐらいの大声だ。

目の前でいわれたのに、それがプティの声だつてことが嘘みたいだ。プティは、両手で涙を拭いて、その手を頬にあてた。すつと息を吸い込んで

パアン、と乾いた音がした。

プティが、自分の両頬を、自分で叩いていた。

青白かった顔が、みるみる赤くなる。でも、涙は止まっていた。

「ティーア、わたくしを、シューケルトのもとへ連れて行ってください。ソラとハゼも、ご同行願います」

年下とは思えない、しつかりした声だった。

ティーアが目を見開いて、それからひざまずく。オレとハゼも、うなずいた。

「わたくしには、責任があります。このままではいられません」

「あ、待つてください！ なら、せめて……」

思いついたように、ハゼが布袋を探る。小さなビンを差し出した。「飲んでください。少しですが、楽になるはずです。ラ・ディオス様の教えに背くことだとはわかっています、けど……」  
プティは小さく目を見張った。それからすべてを承知したように、うなずいた。

部屋を出る前に、ひとつだけ聞いた。

ニンゲンがおこなった、「やってはいけないこと」ってというのはなんだったのかって。

「ニンゲンは……進化するために、自分たちの身体に手を加えたんだ。ナイフを入れていじくって、ヒトではないものを組み込んで、高みに登ろうとした。それは、ぼくらの考え方では、禁忌なんだよ」

なら、ハゼたちは自分たちの歴史を知ったら、なんていうだろう？

## 対決

【対決】 担当 桜

真つ暗なところに、閉じこめられてた。

どこだかわからない。手足をしばられて、口にも布かなんかが巻かれてる。声が出せないし、動けないほどではないけどなんにも見えないから、動くこともできない。

それにしても、なんてばかなことをしたんだろう。

お兄ちゃんに相談するとか、信じてもらえなくてもティーアや八ゼに話すとか、いくらでも方法があったはずなのに。

暗闇の効果もあつてか、わたしはすっかり落ち込んでいた。さっきまでうるさかったおなかも、鳴いてもむだとあきらめたみたいだ。なんだか息苦しくて、くらくらしてくる。

わたし、このまま死ぬのかな。

すぐに殺されたりしなかったのが救いだけど……でも、時間の問題かもしれない。それとも、このまま衰弱死？ 窒息死っていうのもあるかもしれない。ああ、そんなのいやだ！

でも、プティが気づくはずだ。わたしがいないって。そしたら、きつとシューケルトをうたがう。ノートにいろいろ書いたから、それをお兄ちゃんが見てくれたら、お兄ちゃんだってシューケルトが怪しいって気づいてくれるかもしれない。

だれかにニンゲンだつてばれて殺されたんだとか、そんなふう  
に思われてたら最悪だ。

うっん、でもきつと、ニンゲンがいたとなつたら、大騒ぎになるもん。騒ぎになってないところに、陰謀の匂いを感じ取って……く  
れるはず！

信じよう。

お兄ちゃん、勉強はできないけど賢いんだから。

ときどき、上から話し声が聞こえてくる。ってことは、ここは地下なんだ。声が出せれば、ここにいるって報せられるのに。

「……では、ラ・ディオス様は、プティ様もそれほど長くないと？」  
聞こえてきた単語に、耳を傾けた。

「長くない？ どういうこと？」

「残念ですが……そのようです。幼いながら、懸命にがんばっておられるのに。ご両親と同じ道をいくことになってしまつとは」

この声は、シューケルトだ。いかにも心を痛めてるって声。こんなわかりやすい演技に、なんでだれも気づかないの？

ラ・ディオスがどうとかだつて、ぜんぶうそなのに。このうそつきー！ って、叫んでやりたい。

「……………は？ いえ、しかし……………」

会話の様子が変わった。耳をそばだてる。なんだろう。

「ごによごによと小さな話し声。ひそひそ話でもしているんだろうか。」

やがて、ギィ、と戸が開く音がした。

「プティ様がいらつしやつていてというのに、ほかになにを優先させることがあるのですか」

「ティーアだ！」

「なんだか、声が怒ってる。プティもいるの？」

「しかし、いまは……………」

「かまいません。どうかなさいましたか、姫様」

余裕しゃくしゃくのシューケルト。頭の上で、人が動く気配がある。

「わたくしの大切な友人が行方不明になったのです。心当たりはありませんか」

「プティの声だ。でも、いつもの、弱々しい声じゃない。」

「ご友人が？ また、下町のこどもを呼んだのですか。ほどほどにとあれほど申し上げているのに」

「心当たりはありませんか、と聞いているのです」

なんだかプティが強気だ。どうにかしてここにいることを報せないと、身体をよじるけど、物音をたてるまでには及ばない。

「ありませんね」

しらつと突っぱねる。ああもう、なんてやつ！

「ウソだね。あんたが連れてったの、見てたんだよ」

お兄ちゃん！

「この無礼な子どもはなんですか。姫様とティーアならまだしも…分をわきまえなさい」

「サクラをどこにやったんだ！」

わたしはここ、すぐ下だよ！ 下にいるよ！

必死に身体をねじったり手足を動かしたりしてみるけど、どうにもならない。そのうちに、あごから床に激突したけど、それでもなんの音もしない。

でも、やっと気づいた。うつぶせになった拍子に、ポケットに飛び出した小さな救世主。

携帯電話！ 取られてなかったんだ！

しばらくするとはいえ、指先は自由だ。どうにか携帯電話を拾い上げ、音量を最大にして、着信音を鳴らした。

ジリリリリリリリリリリリリリ

ママが設定していた、レトロなベルの音。この音を、お兄ちゃんがまちがえるわけがない。

わたしは、ここだよ！

「サクラ！」

「失礼、調べさせていただきます」

しばらくして、頭上が急に明るくなった。

ティーアとお兄ちゃんが、わたしをのぞき込んで。ティーアが下りてきて、ロープと布をほどいてくれた。

「まさか本当にいるとはな」

呆れたようなティーアの声。わたしは空気を吸い込むことに必死で、それどころじゃない。

持ち上げられるようにして、上へと脱出すると、プティの部屋よりは質素な、それでもじゆうぶんに大きな部屋だった。本棚のようなものに囲まれるように、大きな机がひとつ。

机の横には、シューケルトと……同じような服を着た、たしか名前には、お兄ちゃんと、ハゼと、ハゼに支えられているプティの姿。

一気に脱力した。助かった……！

「バカ！ 考えなし！ タコ！」

お兄ちゃんという言葉が容赦ない。タコって……。

「ニンゲン！」

アラীগってひとが、怯えたような声をあげた。そうだ、フードもしてないから、耳が丸出しだった。

でもいまさら、そんなこと関係ない。

「どういうことですか、シューケルト。わたくしの大切な友人を……」

「どういうことかと聞きたいのはこちらです、姫様。私は、城内にてニンゲンのこどもを見つけたから捕らえたのです。よもや、このこどもが姫様のご友人であるなどと」

シューケルトは、ちっとも動揺してなかった。それどころか、プティが悪いって方向に話を持ってく気みしたいだ。

「ニンゲンが、なぜこの地にいるのだ！ 忌々しい！」

「わたしは、ニンゲンじゃないもん。人間だけだ！」

むだと思いつつ反論してみる。言葉にしまつたら、自分でもなにがなんだかわからなかったけど。

「どういうことですか、姫様！」

アラীগが、プティに詰め寄った。プティはハゼにつかまって、立っているのがやつとって感じた。わたしのあとに出てきたプティアが、すぐにフォローにまわる。

「わたくしの友人です。それだけのことです」

静かに、でもびしりといいはなつ。アラীগが息を飲むのがわか

った。

わたしだっておどろいてる。これは、本当にプティ？

「ちなみに、オレもニンゲン」

よせばいいのに、お兄ちゃんもフードをはずした。

「シューケルト……わたくしが、本当に、なにも知らないとお思いですか」

ティーアにつかまりながら、一步一步前に出て、プティがいった。「なにをですか」

シューケルトは余裕だ。頭にきたけど、でもがまんする。プティがいおうとしてるなら、わたしの出番はまだだ。

プティは、ぐつと息を飲み込んだ。一瞬だけわたしを見て、それからシューケルトを見据える。

「前王と、前王妃が、病にて倒れるという虚言　そしてそれを真と見せかけた殺人。権力を欲しいままにしたいがため、わたくしの料理にも毒を盛っていた……そうですね？」

ティーアとハゼと、それからアラークの目が、おどろきに見開かれる。

きつと、いくらプティの言葉でも、それをすぐに信じるのは大変なことなんだろう。ティーアの目は、困惑していた。

「なにをばかな」

案の定、シューケルトは笑い飛ばす。

「姫様ともあるうお方が、長い療養生活でお疲れになったようですね。哀れな。そのようなこと、あるはずがないでしょう」

「うそ！　この人、さっきわたしの前で認めたの、ぜんぶ自分がやっただって」

「ニンゲンのいうことなど、だれが信じるものか」

笑みさえ浮かべて、シューケルトが吐き捨てる。

くやしい。

……でも、くやしいけど、こうなることはわかってた。わたしは、ポケットから携帯電話を取り出す。

「証拠だつてある」

もともと、証拠をつかみたくて動いたんだもん。そのために、ちゃんと持ってきていた。

再生ボタンを押す。

もちろん、音量最大だ。

「認めるんだ、あなたがやったつてこと」

携帯電話から、わたしの声。視線が一気に集中して、そのなかでお兄ちゃんだけが、ガッツポーズをとる。

「当然だ。愚かな前王と王妃を殺し、姫に毒を盛るという偉業、私以外に、だれが為せるだろう」

まぎれもなく、シューケルトの声。

わたしは、にやりと笑った。

「これでも？」

シューケルトの顔が真っ赤になる。勝った。いくらい逃げたつて、そんな顔したらもうそっちの負けだ。

「な、なんだ、そんなもの！ 忌々しい！ ニンゲンの陰謀だ！」  
取り澄ました口調はどこかにいっちゃって、必死に声をあげる。

その様子を、ティーアとアラীগが、じつと見ている。

「陰謀？ あれさ、いくらでも録音と再生ができるよ。いまここでオレがしゃべったやつ録音して、聞かせてやったら納得すんの？」

お兄ちゃん言葉が追い打ちをかける。

シューケルトは、くちびるをかねで、それから急にティーアを怒鳴りつけた。

「なにをしている！ ニンゲンがいるのだぞ！ 貴様は警護隊の隊長だろう！ 早く捕らえないか！」

「……シューケルト様……」

ティーアは首を左右に振った。

わたしから見て、もう、こっけいなくらいだった、いまさら権力を振りかざしてる。

「できません」

きつぱりと、ティーアが断る。シューケルトは、わなわなと震え出す。

「ほんとうなのですか、シューケルト様」

アラীগが、かすめるような声でつぶやいた。神官はみんなワルモノかと思ってたけど、そういうわけじゃないみたいだ。

けど、シューケルトは答えない。

「なぜ、ラ・ディオス様のお言葉に逆らうようなまねを……！」

「まだそんなことをいつているのか」

急に、シューケルトの顔が変わった。

もついいのがれができないって、気づいたのかもしれない。なんだか冷え切ったような顔。

すぐるような目をしているアラীগと、睨みつけてるわたしたちと、毅然としているプティとを、順に見た。

それから、笑った。

奇妙に顔の筋肉がゆがんだ、おかしい笑みだ。

「……この国は、まちがっている。愚か者どもの集まりだ。信じることこそが美しいと思っっている。変わらないことこそ至上の喜びを感じている。……なんと、愚かな」

おどろいたことに、それは、わたしがプティに投げつけた言葉と似ていた。

「それは、つまり、なにかも他にゆだね、あきらめるといふことなのだ、なぜ気づかない」

静かな怒りを含んだ声だ。だれも、なにもいえない。黙って聞いている。

「ラ・ディオスだと？ だれか、実際に会ったことがあるのか。だれか、本当に救われたのか。最高位の神官のみが、その声を聞くこ

とができるとされているが……それこそが虚実だ。前任が急逝し、私が最高位になり、最初の儀式　声など聞こえなかった。聞こえなかったのだ……いくら儀式をくり返しても、いくら耳を傾けても声など、一度も！　あのときの絶望がわかるか！　信じていた、ずっと信じてきたものに裏切られた、あの絶望がわかるか！」

投げかけた問いに、答える声はなかった。  
しん、とした沈黙。

このひとは許せないけど……でも、そうか、このひとだって、傷ついたんだ。

この世界がおかしいっていうのは、やっぱり本当なんだ。

「だが、だれもが私に声を求めた。ラ・ディオス様のお声はと、口を開けば、そればかり。

私は、聞いてもいない、ありもしない声を告げた。　するとどうだ？　だれひとりとしてうたがわれない。なんの疑問も持たない」

だんだんと、声が枯れていくようだった。シューケルトは、大きく、息を吐き出した。

「……私は悟ったのだ。理解したのだ。この国の愚かさを。これは、果たして本当に、私の責なのか」

やっぱりだれも答えない。

プティが、ぎゅつと唇を噛んでいる。ハゼは泣きそうな顔をしていて、ティアアは怒ったような顔。

でもそのなかで、お兄ちゃんだけが、口をはさんだ。

「そりゃそうだろ」

その声は、めずらしく、本気で怒ってるみたいだった。

「悪いことは、悪いことだろ。そんなの、こどもでも知ってる」  
シューケルトは黙った。そして、それ以上、言葉はなかった。

……うん、お兄ちゃんのいつてること、わかる。そりゃ、いろいろおかしくて、まちがってるけど……

だからって、ひとをだましていいってことにはならない。殺す理由にはならない。

「わたくしの責でもありません」

静かに、プティがいった。

「プティ様！」

「いいのです、ティアーア。立たせてください、ひとりで」

プティは、瞳を閉じて、静かに深呼吸をした。だれの手も借りず、まっすぐ、背筋を伸ばして立つ。

ゆっくり、ゆっくりと、シューケルトの前まで、歩を進める。

「変えましょう。この国を、この世界を。わたくしは、すべてを知っているのに、動かなかった。変えようとしている小さな動きにも、耳を傾けなかった」

そうして、そつとハゼを見る。……どういうこと？

それから今度は、わたしと、お兄ちゃんを見る。

「友人に背中を押してもらわなければ、なにもできなかったこと、恥ずかしく思います。責は、わたくしも同じです」

プティは、シューケルトに、右手を差し出した。

おどろいたように、シューケルトが顔を上げる。

「あなたのこと、許す日はこないでしょう。けれど、わたくしも、愚かでした。この世界を変えていく、手助けをしてくれますね？」

……それって結局、許すってこと？

プティのパパとママを殺したのに？ プティだって殺されるところだったのに？

まるで理解できなかった。けど、それが……この世界なのかもしれない。

やっぱり、わたしにはわからない。

「変えられるはずがない」

シューケルトはうめいた。知っているからこそその、言葉だ。

でもプティは、首を左右に振った。

「そうかもしれません。けれど、だから動かないというのは……もう、おしまいにしてしまう」

シューケルトは、言葉を返すことはなかった。  
ずいぶん長い時間をかけて、やっと右手を持ち上げる。そうして、  
その手を握り返した。

未来へ

【未来へ】 担当 空

あれから、数日が経った。

ハゼの薬の効果もあつてか、プティはぐんぐん良くなっていった。気持ちの問題もあつたんだろうって本人はいつてたけど。

ラ・ディオスとか、神官がどうのとか、そういうのがなくなったわけじゃない。つつーか、廃止はしないらしい。ただ、その、なにもかも神様のいうとおり！　っていう考え方を、少しずつ変えていくんだそう。それには、なんだかんだいって信頼されてきたシューケルトっておっさんのがんばりが必要ってことらしい。

それから、これは当然だけど、病気になるったら城に来るっていうのはなくなつた。これからは各地に病院を作る方針みたいだ。ただ、これこそ人々の考え方を根底から変えなきゃなんないし、薬とかの知識があるのもハゼだけだしってことで、さうとう大変な道のりになるのはまちがいない。

まあ、オレには関係ない。

オレとはちがう世界の話だ。

「……あんたさ、ぜんぶ知ってたろ」

桜とティーアは買い物、ハゼは忙しくかけずりまわつて、プティの部屋には、オレとプティだけだ。

いい機会だから、聞いてみた。

「なにをですか？」

すつとぼけてるってわけでもないみたいだ。オレは、ちょっとむつとしてプティを見る。

「この世界には、ニンゲンが、もういないってことだよ。そうじゃなきゃ、やっぱり、ティーアにオレらの話を聞いたときに、異世界から来たって思うとかって、おかしいだろ」

こたえずに、プティは笑顔を見せる。……知ってたって顔だ。そう、オレが壁の向こうで知ったこと。

この世界のニンゲンは、もうずっと昔に、絶滅していたらしい。そもそも、ビースルっていうのは、ニンゲンの実験のひとつとして誕生した。ヒトとケモノをかけ合わせたら、どんな生物ができるか。成功例がここに暮らしてるビースル、失敗例がああのか、ペルティスってやつらしい。王族ってのは、そのなかの希少種で、ふしぎな能力を持ってたことで自然と崇められていったみたいだ。だからプティだけ、耳がちがうのな。

ニンゲンは、実験の一環として、ビースルに土地の一部を与えた。居住区を壁で囲って、ビースルもペルティスもぜんぶ放り込んで、どう進化していくかを長年にわたって観察してた。その一方で、進化を求めるあまりに自分たちの身体に改良を重ね、病気になって困るなら病気にならないようにしよう、と単純な思考で身体をどんどん機械化……やがて子孫ができなくなって絶滅。よくわかんないけど、そういうことらしい。

ハゼのいってたニンゲンの歴史と、そんなにちがってるわけじゃないから、きつと絶滅するまではそれなりに交流もあつたりしたんだろう。

オレは、このことを、ハゼたちにいうつもりはない。最初はショクだったけど……けど、結局、関係ないんだ。

歴史がどうだったかなんて。こいつらは、ここでこうして、生きてるんだから。

「実は、ヒミツが、もうひとつ」

そういって、プティはいたずらっぽく笑った。なんだか初めて、こいつが桜と同じ歳だって納得できるような、そういう笑顔だ。

「ヒミツ……？」

「ただいまー！ お菓子たくさん買ったよ！」

桜とティアが、部屋に入ってきた。どういいうわけか、ハゼもいっしょだ。城の外で合流したらしい。

「ね、プティ、もういろんなもの食べられるでしょ？ これとかどう？」

ハイテンションで、桜がベッドの上にパンやら菓子やらを並べていく。荷物を持たされていたらしいハゼが、よろめきながら袋を下ろした。

「サクラ、嬉しいですが、いつしよに食べることはできません」

プティは、そういつて微笑んだ。身体を起こし、両手を広げる。母さんが、まだ小さな桜を抱っこするときみたいな仕草だ。

「え？ なに？」

困惑しながらも、桜がプティの腕のなかにおさまる。プティは、ぎゅっと桜を抱きしめた。

「ありがとうございます、サクラ。サクラは、いつまでも、わたくしのいちばんの友人です」

「やだ、どうしたの。照れるなあ」

桜が顔を赤くしながら、頬をかく。プティは今度は、オレに右手を差し出した。

「ソラも、ありがとうございます。わたくしも、ソラみたいな兄様が欲しかった」

「……おう」

なんだってんだ、急に。でもまあ、悪い気はしない。ぎゅっと握手を交わす。

「ティーア、ハゼ」

プティが、静かに二人の名を呼んだ。

ティーアとハゼが、顔を強ばらせる。

「……帰すのですか」

ティーアがつぶやいた。……帰す？

「扉を開いて、来てくれたのがあなたたちで良かった。本当は……変わらなければと思っていたのだと思います、心のどこかで。ありがとうございました。たくさん、本当にたくさん、助けていただきました。でも、楽しい時間は、おしまいです。これ以上、お二

人に甘えるわけにはいきません」

「え？ どういうこと？ ……プティ、まさか」

桜の言葉に、プティは微笑んだ。　　そういうことか！

考えてみれば、こっちの世界に来て最初にティータに見つかるっていうのも、すごい確率だ。自分のところに連れてこさせるつもりで、わざとそうなるようにしたんだとしたら、納得できる。

なにが、わたくしにも力が備わってるのかもしれない、だ！　こいつ……！

「知ってたな？」

睨みつけると、ハゼはあわてて手を振った。

「少し前に聞いたただけだよ！　だから心配しないで欲しいって。…

…でも、そっか、帰っちゃうんだね」

ハゼが、へらつと笑った。むりやり笑ったみたいだ。目がもう赤い。こいつ、男のくせに、泣き虫なんだよな。

「君たちに会えてよかった。ずっと、忘れないよ」

「な、泣かないでよハゼ！　なんで泣くの？」

そういつてる桜も、泣きそうになってる。

ぐいと、手を引かれた。オレと桜が引っ張られて、二人いつぺんに、ティータに抱きしめられていた。

「また、いつでも来い」

一言だ。

なんだかその一言に、変に胸が熱くなる。

「……………うん」

もう来ないとわかってるけど、でもティータだってきつとわかってる。

それでも、オレと桜はうなずいた。

「ティータのシチューも、ハゼのパンも、おいしかったよ。プティとお話するのは、すごくすごく楽しかった。わたし、最初は……………」

桜の声が涙声になる。かんべんしてくれ。

オレにまでうつりそうだ。

「わたし、最初はね、すごくこわくて不安だったけど……でも、来て、良かったあ」

とうとう声をあげて泣き出した。たのむから、泣かないで欲しいの。

「ほら、お兄ちゃんも！」

泣きながら背中を押される。なにをいえってんだ……

見ると、そこにいる全員が目を赤くして、こつちを見てた。オレは、ちよつとだけ上を向いた。

下を向いたら、オレの目からもなんかこぼれそうだ。

「……うん、楽しかった、と思う」

そんなことしかいえなかった。でもたぶん、これでいい。

プティは、ベッドから降りると、ドレスの裾を直すようにして背筋を伸ばした。まるで鳥が羽を広げるみたいに、両手を伸ばす。

いつのまにか、オレと桜の身体が、浮いていた。桜があわてて手をのばしてきて、オレはそれをつかむ。

ハゼとプティと、ティーアが、どんどん下になる。オレと桜は、

壁も天井もおかまいなしに、どんどん上へ上へと浮いていく。

「ありがとう、最高の友人たち　！」

プティの声が遠くに聞こえて、下から一気に風が吹いた。ものすごい勢いで、持ち上げられる。

「お、お兄ちゃん！」

「すげえ……！」

下に広がっているのは、ハゼたちの世界。

たくさんのお木々、川、湖、家、城　数え切れないたくさんのお花、たくさんのおひらが生きてる証拠が、どんどん小さくなっていく。

「きれい！」

桜が叫んだ。

きれいだった。

壁の向こう側で、画面で見た世界よりもずっと。

「この世界は、こんなにも、きれいだ。  
「あっ」

桜の声で、オレは上を見た。  
細長い丸が、口を開けて待っている。  
手を伸ばし、そのなかに吸い込まれていく

\*\*\*

「……ぶ？ だいじょうぶ？」

オレは、目を開けた。

なにが起こったのかわからない。頭が、ぼんやりとする。

白いジャージを着た女の人が、オレの顔をのぞき込んでいる。

「転んじやったのかな？ 平気？」

オレは、うつぶせに倒れていた。あわてて身体を起こす。

横に転がっていた桜が、寝起きみたいに身体を伸ばす。目をこす  
つて、それからきよろきよろとまわりを見た。

「……あれ？」

きよとん、してる。それはそうだ、オレだってなにがなんだかわ  
からない。

ぼんやりとした頭をむりやり起こすように、思い切り横に振った。  
それから、自分の目に見えているものを、しっかりと認識する。

すぐとなりには、ベンチ。

その反対側には、テニスコート。

テニスコートのなかに、白いジャージの女の人たち。オレに声を  
かけてくれた人も、そのなかに戻っていく。

公園だ。

服もカバンも、そのままだ。

「お姉さん！」

桜が勢いよく立ち上がり、テニスコートに向かって呼びかけた。

「今日って、何日ですか？」

「えっとー……七日かな？」

七日。

オレも立ち上がって、声を張り上げる。

「何年何月の七日っ？」

女の方はふしぎそうな顔をしたけど、ちゃんと答えてくれた。

「二〇〇八年、五月七日……よ。どうかしたの？」

オレと桜は、顔を見合わせた。

両手を握り合って、にんまり笑う。

「帰ってきた！」

「帰ってきた　　！」

人目なんか気にせず、力いっぱい叫んだ。何度もジャンプして、二人してぐるぐるまわる。

「ねえ、すぐにうちに帰ろう！」

真っ赤な顔をして、桜がそう提案してくる。おう、とうなずきかけて

ちよっと、考えた。

「どうしたの？ 帰ろうよ」

「いや、まだ帰らない」

オレはいった。強い意志を込めて。桜が、不満そうな声をあげる。

「なんで、じゃあ、どこ行くの！ やだよ、帰ろう！」

オレは、桜をにらむようにして見た。

こいつ、忘れてるんだろうか。あれだけつるさかったのに。

「ばっか、今日は塾だろ。走れば間に合う。行くぞ！」

「ええーっ？」

悲鳴をあげる桜の手をつかんで、オレは走り出した。

遠い向こうの空が赤い。これは、オレたちの空だ。  
立ち止まっているわけにはいかない。  
オレにだって、ここで、できることがあるはずなんだから。

【おわりに】 担当 桜

これで、わたしたちの記録はおしまいです。

最初はわたしが書いたんだから、最後はお兄ちゃんが書いてよっていったんだけど、どうしてもやだつて断られちゃった。三回も頼んだのに。

これを読んでいるのが、未来のわたしか、お兄ちゃんか、それともぜんぜん知らないだれかか。それはわからないけど、ええと、ひとつだけ、メッセージ。  
どうか、忘れないでね。

あなたが覚えていてくれたなら、きつとわたしたちの記憶だって、色あせないと思うから。

ああ、なんだか、もったいないな。

これで終わっちゃうのかな。

もしも、これを読んでいるだれかが、プティやハゼや、ティールアに会うことがあったら、わたしたちのこと伝えてね。

とっても楽しかったよ。

ずっと忘れないよ。

大好きだよって。

最後に……

読んでくれて、どうもありがとう。

またね！

未来へ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

これは、「ムーンチャイルド企画」参加作品です。

こどもが主役ということで、私の中ではだいぶ異色ですが、楽しんで執筆しました。

よろしければ、ご意見ご感想等、いただけると幸いです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2109e/>

---

空と桜の冒険記録

2009年3月24日09時37分発行